

# 被爆証言集

— 2021 —  
(第四版一部改訂)



神奈川県逗子市被爆者の会  
(つばきの会)

## まえがき

私達が所属する神奈川県原爆被災者の会が正式に結成されたのは昭和四十一年、昨年は発足二十五年でした。その後県下各地に被爆者の会が結成されましたが、逗子に被爆者の会ができたのは三年まえ昭和六十三年です。そして私達に何ができるか、何をなすべきかという話し合いの中で取り上げられたのがこの「証言集」でした。

古い著作の中から生々しい体験記を提供された方、四十六年前の記憶をたどりながら、涙と共に初めて体験記を書いたという方、そして二度と思い出したくないいいながら、書きはじめると当時のことが思い出されて眠れなかった、という方もありました。そして漸くでき上がったのがこの証言集です。

顧みますと昭和二十年八月、広島・長崎に投下された原爆は、一瞬にして数十万人の生命を奪いました。そしてその被害は放射能と熱線と爆風の複合効果により、大量無差別な破壊・殺傷となり、その非人道性は言語に絶するものがありました。生き残った人もケロイド等の身体的原爆後遺症だけでなく、就職・結婚等についての社会的迫害に耐え、今高齢化と病弱化の中にあります。

一方昨年十二月、真珠湾五十周年を前にブッシュ米大統領は「広島・長崎への原爆投下は正しい決定であった」といいました。原爆は国際法上禁止されている毒ガスや生物化学的兵器よりも人道的な兵器というのでしょうか。私達には決してそうは思われません。私達は世界で唯一の被爆国民として、核兵器の真実の姿をモットモット多くの人々に知って貰い、その理解のもとに「核兵器も戦争もない平和な世界を」と願ってやみません。

平成四年三月

神奈川県 逗子市 被爆者の会

会長 田栗末太

## まえがき 【増補改訂】

この「証言集」の初版が発行されて丁度十年が過ぎました。被爆者の平均年齢は七十歳を超え、当会でも亡くなった方、転出された方も多くありましたが、新しく加入され活躍している方もあります。そこでこの証言集の増補改訂を行うことになりました。

冷戦の終結と共に核軍縮は徐々に進んでいきましたが、二〇〇一年の9・11事件以降、状況は一変しました。今年原爆の日、広島・長崎の平和宣言では「憎しみと暴力、報復の連鎖を断ち切る和解の道」また「独善的核政策は核廃絶に逆行」とアメリカを名指して批判されました。

このような時に、この証言集の増補改訂を行うこととなりました。この小冊子が、核兵器の非人道な真実の一端を伝えることができれば幸と思います。そしてこの証言集が、原爆の犠牲となられた方々の鎮魂と、核兵器のない平和な世界への一助となることを望みます。

二〇〇二年（平成十四年）十月

神奈川県 逗子市 被爆者の会 会長 祐野 孝文

## まえがき 【第四版改訂】

今年には原子爆弾被爆後七十年、0歳で被爆した方でも七十歳になります。

一九四五年八月、二十世紀半ばに広島市と長崎市の市民と街が受けた筆舌に尽くせない惨禍からはや七十年、次の二十一世紀、二〇一五年になっています。

この間、我々被爆者は核兵器の廃絶という共通の大きな目標を掲げて草の根運動を続けてまいりました。今後とも続けていくでしょう。

しかし、核兵器の廃絶はまだ先が見えてきません。世界には一万七千発もの核兵器が存在するといわれています。このような状況の中、この小冊子は逗子市に住む被爆者がそのとき遭遇した地獄の体験を伝え、明らかにした貴重な証言集です。核兵器の廃絶を訴えつづけ、平和を確保し、運動を繋いでいくためにこの証言集が役立てば幸いです。

二〇一五年（平成二十七年）三月

神奈川県 逗子市 被爆者の会 会長 上田 芳雄

# 原子爆弾の概要

## 広島・長崎に投下された

	広島	長崎
原爆投下日時	1945年(昭和20年) 8月6日 午前8時15分	1945年(昭和20年) 8月9日 午前11時2分
爆発高度	約580m	約503m
原爆の種類	ウラン原爆	プルトニウム原爆
爆発力(TNT火薬)	約15キロトン	約22キロトン
放出エネルギー	約14兆カロリー	約20兆カロリー
当時の人口	約42万人	約27万人
被爆死没者 (1945年12月まで)	約14万人	約7万人
	両市合せて約21万人	
慰霊碑への合祀者 (2013年8月現在)	28万6818人	16万2083人
	両市合せて44万8901人	
	 <p><b>広島原爆</b> 直径 約0.7m 長さ 約 3m 重さ 約 4トン 「リトルボーイ」</p>	 <p><b>長崎原爆</b> 直径 約1.5m 長さ 約3.3m 重さ 約4.5トン 「ファットマン」</p>

# 被爆証言集

## 目次

まえがき（平成四年・平成十四年・平成二十七年）

広島・長崎に投下された原爆の概要

被爆当時の広島・長崎の地図

死線をこえて……………	(広島)	井上典民……………	1
十才の思い出……………	(広島)	小田倫子……………	3
「妖光とその尾」より……………	(広島)	衣川 <small>ころも</small> がわ <small>がわ</small> 舜 <small>きよ</small> 子 <small>こ</small> ……………	5
大野陸軍病院にて……………	(広島)	酒井喜代子……………	10
あの日……………	(長崎)	宅島ミヨ……………	13
父・母を捜して……………	(長崎)	田栗末太……………	16
オレンジの色が……………	(広島)	谷永久江……………	18
「祭の場」より……………	(長崎)	林京子……………	20

忘れないで下さい……………	(広島)	宮川千恵子……………	23
弟への鎮魂……………	(広島)	山田和子……………	27
「被害は軽微なり」……………	(長崎)	祐野孝文……………	29
「ブラジルに行こう」……………	(長崎)	林京子……………	31
地獄絵の中を駆け巡る……………	(長崎)	伊崎善明……………	34
忘れえぬ長崎の事……………	(長崎)	近藤敏子……………	36
つらかった死体の焼却……………	(広島)	鈴木健次……………	38
私の8月6日……………	(広島)	堤達生……………	40
つばきの会の歩み……………			45

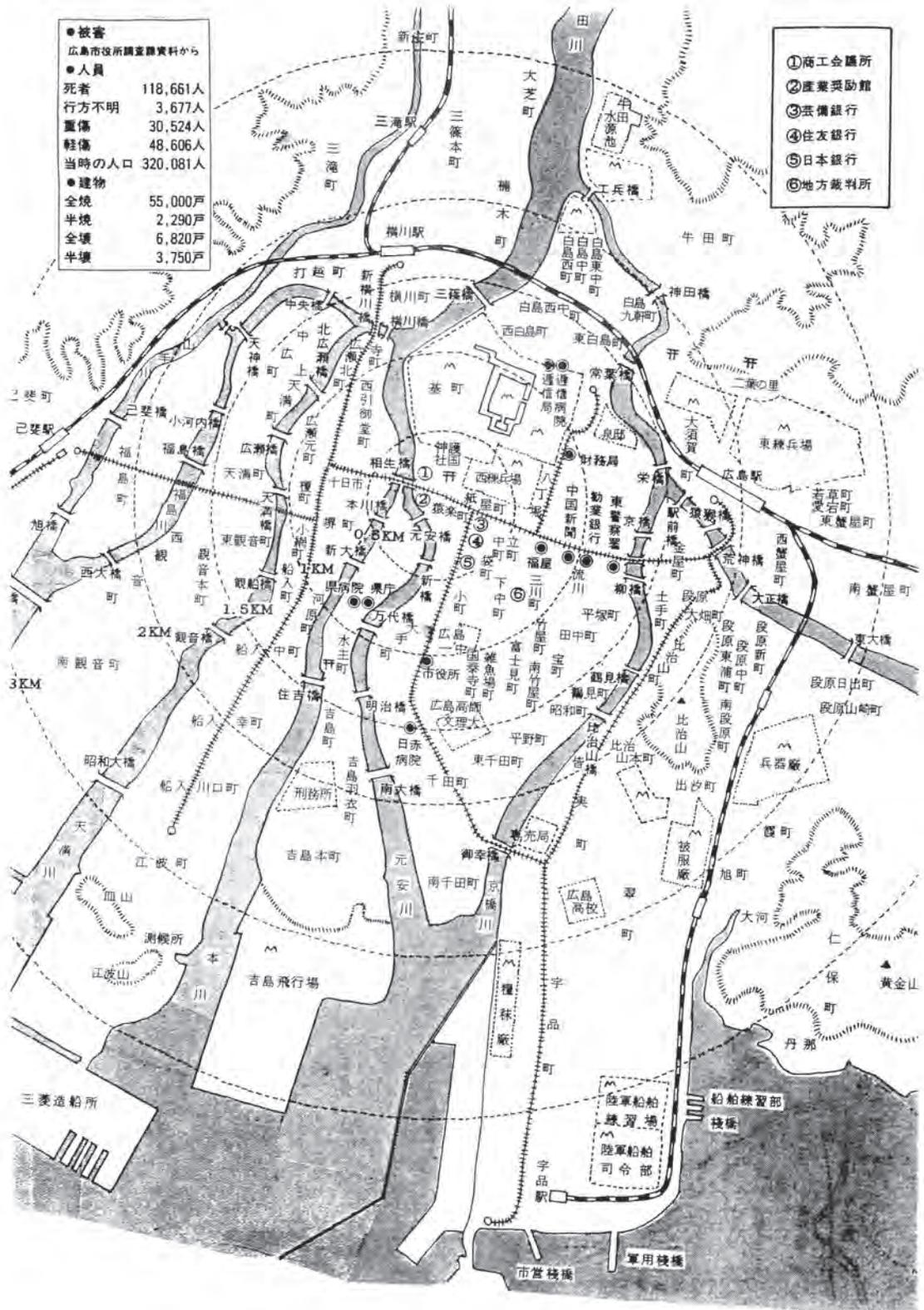
# 広島市

●被害  
広島市役所調査資料から

●人員  
死者 118,661人  
行方不明 3,677人  
重傷 30,524人  
軽傷 48,606人  
当時の人口 320,081人

●建物  
全焼 55,000戸  
半焼 2,290戸  
全壊 6,820戸  
半壊 3,750戸

- ①商工会議所
- ②産業奨励館
- ③武備銀行
- ④住友銀行
- ⑤日本銀行
- ⑥地方裁判所



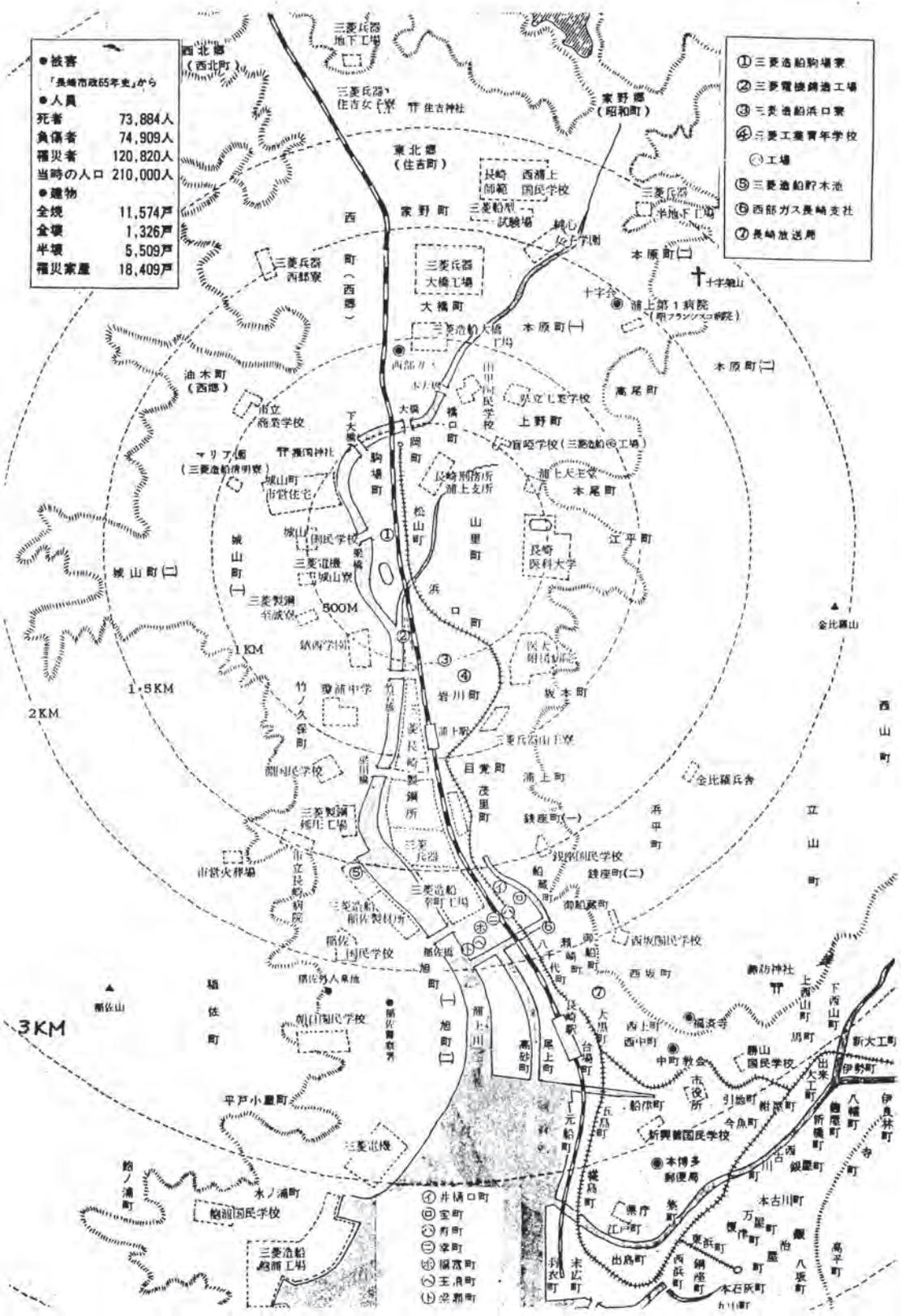
# 長崎市

●被害  
「長崎市65年史」から

●人員  
死者 73,884人  
負傷者 74,909人  
罹災者 120,820人  
当時の人口 210,000人

●建物  
全焼 11,574戸  
全壊 1,326戸  
半壊 5,509戸  
罹災家屋 18,409戸

- ① 三菱造船船塢
- ② 三菱電機造船工場
- ③ 三菱造船船渠
- ④ 三菱工業青年学校
- ⑤ 工場
- ⑥ 三菱造船貯木池
- ⑦ 西部ガス長崎支社
- ⑧ 長崎放送局



- ① 井筒町
- ② 室町
- ③ 町町
- ④ 幸町
- ⑤ 福富町
- ⑥ 玉皇町
- ⑦ 忍町

## 死線をこえて (原爆体験記)

(広島) 井上典民

その日、昭和二十年八月六日、私は、広島市宇品町の陸軍第六一四〇部隊(船舶隊)金輪島糧秣廠に学徒動員で、級友と共に出勤していた。あの忌しい原爆が広島市に投下された日のことである。

八時十五分、朝礼前の私達は、島(爆心地より約十二km)の糧秣廠兵舎前の広場で遊んでいた。突然、ピカッ!と白い閃光が走ったかと思うと、ものすごく熱い熱が波状のように押し寄せてきた。「熱いっ!」私はとっさに反対の方向に走り出していた。その途端、爆風によって四、五mほど吹き飛ばされ、地面にたたきつけられてしまった。日頃から訓練をさせられていたせいも、無意識のうちに目と耳を両手で押えていた。その時、ドーンと爆発した音であるのか大きな音が聞こえた。危険を感じて、急いで横穴の防空壕に駆けこんだが、穴の中の頭上から土砂がぱらぱらと落ちてくるので「生き埋めになる」ととび出した。「何だろう?」と広島湾の海を越えて一望に見渡せる市街の方を見ると、きのこ雲が空高

くもくもくとたちのぼっており、その下の方は、広島市全体を包むかのように広がっていた。島の建物の屋根は吹きとばされ、窓ガラスは跡かたもなくなくなっていた。屋内にいた友達が、血を流しながら出てきたが、何が起こったのかは全くわからなかった。

広島市上空にもくもくと高くのぼっていききのこ雲、やがて市街地のあちこちから燃え上がった火の手や煙を見ながら、私達は命じられた作業を始めた。九時三十分頃、ようやく新型爆弾の投下によるものだという情報と共に、負傷者が舟でぞくぞくと島に送られてき始めた。同時に、皆実町の寮(爆心地より約二km)が倒壊し、寮生の行方不明者がいるので救援を要請してきた。

無傷だった私達は、すぐ救援のために市内に帰った。しかし、そこには筆舌に尽し難い光景が展開されていたのである。火傷で顔や体が焼けただれ、暑い夏の日射しの照りつける道路上に、苦しさにころげまわる者、たまらず川にとびこむ者、水をくれと叫ぶ者、既に真黒こげになって死んでいる者、手足が折れてぶらつかせている者、傷をおい、血で真赤になっている者、今まで生きていたのにと赤子を抱いて泣く母親、泣き叫ぶ者、避難していく者で道はごった返していた。正にこの世の生き地獄であった。五体満足で行くのは私達だけであつたが、助けを求められてもどうすることもできなかった。

寮は全倒壊していた。私達は早速、木片や瓦礫などを取り除き始めた。約百五十名の下級生がいたが、殆どの者は自力で倒壊の下から脱出していたが、一名はまだ柱と柱の間にはさまれていたものの生存していた。そして四名は死体として掘り出された。

きこの雲はいつしかなくなり、かわって家が燃える煙がもくもくと立ちのぼっていた。

夕方私達は、町はずれにある私達の寮へ帰ったが、倒壊はしていなかったものの傾斜していて危険であるとのこと、夜は毛布を持ち出し、寮のまわりのぶどう畑に敷き、赤々と燃える火が空に映るのを見ながら寝た。

翌日、私の部屋の者五名は、背中全面に火傷をおわれた学校長夫人の看護当番を命ぜられ、近くの小学校に設けられた臨時救護所へ治療のため担架ののせて通うことになった。救護所となっている小学校の教室には、どこも多くの負傷者が収容されていた。その殆んどが火傷であり、異様な光景であった。火傷のあの独特な異臭、体の前面が火傷し、男女の区別もつかず目だけがギョロギョロしている者、苦しさにうめいたり、泣いたり、叫んだりする者、助けてくれとすがる者、水をくれとせがむ者達が無雑作に並べられたむしろの上に横たわっていたり、うつ伏せになったりしていた。私達も学校長夫人の治療の間看護を手伝ったが、負傷者は次々に

くなつていった。看護兵達は、それらの死体を校庭の隅に積み上げ、重油をかけながら焼いていた。

学校長夫人は、治療の甲斐もなく二日後の八日になくなられた。私達は、九日に岩国爆撃の音を聞きながら、艦載機の襲撃を受ける中で、夫人を校庭の防空壕でダビにふしたのである。

このようにして、一瞬のうちに多くの尊い人命が無残にも奪われたのであるが、その年の終わり頃まで、川の土手のあちらこちらで死体を焼く煙がのぼっており、頭がい骨や焼け残った死体の一部があちこちどころがっていた。

以上が私が経験した被爆時のようすである。ともあれ、こうした経験を経た私をはじめ、日本や世界の多くの国々の人々が、現在、平和で落ち着いた暮しができることは、何と幸せなことであろうと思わずにはいられない。いろいろな自治体では「非核平和都市宣言」を採択しているが、二度と再びこのような悲惨なことが起こらないことを願うや切である。

## 十才の思い出

(広島) 小田倫子

昭和二十年ピカの落ちた年、新学期を迎えると、児童は集団疎開をすることになった。五年生の私も、柳行李に一杯の荷物を詰め、名前を筆書きして親元を離れる不安を感じていた。しかしその前日、父は広島芸備線に沿う田舎に離れを見付けてくれ、私は縁故疎開という形になった。母と四才の妹は、市内の家と疎開先を行ったり来たりで、十才の私は一人で御飯を炊き、学校に通う生活だった。夜になると、戸外のそれも裏山の麓にある、真暗な手洗いに行くのが恐く、今思い出してもぞつとする暮らしたかった。

一学期が終り、夏休みだというのに、何故か八月六日のその朝、八時十五分に私は学校に居た。ピカッとすごい光が教室にさし込んで、壁に反射した光景を鮮烈に記憶している。広島が大変だというニュースが間もなく聞かれると、丁度、町内会の松やに取る労働奉仕に来ていた父は、すぐ様広島に向った。

夕方になると、田舎の駅には、ものすごい格好をした人達

がぞろぞろ降りてきた。その行列の中から、町の様子を話してくれたおじさんは、偶然に同じ町内の恩師の親戚の人だった。まだそれが原爆だということを知る人はなく、それが分ったのは翌日だったろうか。小学校は忽ち避難所となり、教室には病人があふれた。私達も近くの医院に薬を取りに行ったり、廊下の掃除をしたり忙しく手伝った。

母も翌日には、四才の妹を私に託して広島に行った。西観音町にあった生家は、無論、跡形もなくなつたが、その朝、長姉夫婦はその家から電車の停留所に向っている途中ピカに会い、二人共右半身に火傷を負つた。次姉は二階に居て二人を見送り、自分も徴用先に勤めに出るため着替えている時だった。ピカッと来て、爆風で家がぐしゃつとつぶれ、障子の棧かが両足の太ももに突き刺さつたまま、家の下敷きとなつた。運の好いことに隣が消防署で、懇意にしていた署員の助けで命を助けられた。三番目の姉も二階に居たが、ピカッと鋭い光と音に驚いて階下に降りようとした時、窓ガラスの爆片が右腕一杯に突き刺つた。(後年、このガラスを取り除くのに、女学校三年だった姉は、何回も手術を繰り返し傷跡が見えない様、真夏でも長袖を着ていた)火傷を負つた長姉夫婦が家まで戻り、ようやく抜け出した二人を連れ避難所にとどりに着いたという。

観音町によく辿り着いた父は、あちこち皆を探し、避

難先から宮島沿線の親戚へ助けを求めた。母は翌日から娘たちの看病に当たったが、火傷の二人の症状は重く、傷口には毎日ウジが湧いた。幸い親戚に、薬品会社に勤める人がいて、薬が手に入り命は助かったが、身重だった姉は、月足らずで出産、男子が生れたが、可哀そうに間もなく死んだ。

八月七日に母が看病のためいなくなってから、取り残された四才の妹はすぐに母を恋しがり、私も同じであった。父は私たち二人を連れに来てくれたが、その折見た広島町は一面の焼野が原で、瓦礫の間から死体を焼く煙が立っていた。五日市の親戚に行くと、母の末妹の嫁ぎ先の縁者が二人来ていて、鷹匠町たかじょうのその家は全滅し、叔父や叔母その両親弟妹の死体も見つからないという。今に到るもとうとう仏様は見つからない。

父と共に観音町の生家の辺りに戻ったが、どこがどこやら見当もつかない。道路向いにあった父の弟の家も焼け、東洋工業に勤めに出た叔父は助かったが、叔母と二才の娘は即死した。四才の息子はどこに逃げたか行方が分らず、その後何年たっても、叔父はそれらしいニュースを聞くと直ぐに探しに行ったが、いつもがっくりして戻ってくるのだった。

穀物を商っていた父は、苦勞して元の場所に掘立小屋を建て、年内に疎開先を引き払った。観音小学校は焼けてなかったが、私達ははるばる三菱造船のある南観音の突端に、焼け

残った青年学校に通学した。その場所は今広島空港となっている。昨夏、原爆慰霊式典に参列のため空港に降りたが、すっかり変り僅かに三菱造船所のクレーンと、戦後のカーブを育てた陸上競技場とその面影を見るだけだった。

明治、大正、昭和の激動期を生き抜き、人類最初の原爆投下の洗礼を受けた父と叔父は二人共肺がんで亡くなった。我が家にそれ迄癌で死んだ人はいなかったのに、やはり原爆の影響であろうかと思っている。私も二人の子を産んだ後、肝ぞうを患い入院した。逗子に来てから元気にしているが、すぐく疲れ易いので、常に休養をとるよう心がけている。

(平成三年九月一日)



# 「妖光とその尾」

(昭四八・八・六)より

(広島) 衣川舜子

(筆者) 本籍、京都府。大正二年名古屋生まれ、昭和十二年東京女高師卒。終戦まで広島市私立進徳高女に勤務、昭和二十年八月六日広島にて被爆。昭和二十二年から三十六年まで県立逗子高校に勤務。昨平成三年春、がんとこの宣告を受けて発心。出来るところまでという気持ちで、目下源氏物語の漢詩訳に精進中。桜山在住。

著書Ⅱ「ひろしま」、「竹の花」、「逗子の浜貝」、「妖光とその尾」、「榿」(詩歌集)、「南十字星」、「桜の陰」(母校の思い出集)、「マニラ湾の夕映」、「けやきと松と藪茗荷」など。

## (一) まえがき より

還暦という年は、単なる個人にとつての記念すべき年という事であろうけれど、しかし私の場合にはこれに更に複雑な気持が絡んでいる。被爆の身で、一旦致命症を受けながら六十歳までも生きさせてもらった、という気持ちだ。

あの人、この人と自分が知り、親しみ、敬愛した人々の名も、挙げれば果てしもないが、その外にもたしかに広島だけで二十万は下らないと思われるほどの人数が、あの瞬間に爆死し、焼死し、そしてそのあと原爆症で又次々と亡くなつていったのに、自分はまだこうして生きている、という思いである。

「生き残つた」という実感がまだ極めて鮮烈であつた昭和二十四年の七月、記憶がうすれぬうちにメモしておこうくらいの軽い気持ちでそこはかとなく書き綴つたものが、ふしぎな縁で亡兄の友人大塚英雄氏(今は故人)の手から京都の丁子屋書店主人藤井博職氏ひろなかつの手に渡り、氏はこの原爆という今まで世界に類例のない大量殺人兵器の、被害体験者の実記録の一つを、世にのこしたいとの念願から、それこそ損得を顧みず刊行されたのだが、やがて氏も病歿せられ、店は看板をおろさざるを得ない仕儀となつたので、私の「ひろしま」も他の多くの書と共に、事実上絶版となつて既に長い歲月が流れ

た。

それを戦後二十八年も経った今、あらためて資料を補い、構想を新たにして再刊に踏み切ったのは、一つには今の世の中が、外見は一応平和に見えていても、心をもつ限り誰も誰もが、心身両面にじりじりとさし迫ってくる危機感のようなものにおびえ、かつての大戦の頃には交戦国の民だけに限られていたのが、今や一切の牆かきを超えて、世上あまねく奈落への道を走っているかとさえ思われる諸現象の中で、現実問題としていかに「人間」を守るかという基本的問いにさえ答が得られないこの苛立たしさに、自分は自分なりに何とか立ち向わねばならぬという思いに駆られたからである。

つまり、人間の知力暴走の、最大所産の第一号たる原子爆弾の一被災者として、何を言い何を為すべきかを、もう一度あの時の原点に立ち戻って、あの時我々に代って死んでゆかれたその人々の霊の声にも耳を傾けつつ、静かに自分自身を凝視した上で、何らかの結論が出るか、出ないか、とにかくつきつめられるだけつきつめてみたかったのだ。

何といっても、原子兵器の被害者、生き証人は、この地球上に、日本のヒロシマとナガサキにあの時居た者達だけなのだ——ゆめゆめそれ以外に、今後もあり得てはならない——そしてその数は、今や年月と共に加速度的に減り、その体験を語ったり書いたり出来る者、その意志のある者も、それに

比例してなおさら減って来ていることを考えれば、一層せきたてられるの思いである。

それと今一つは、いささか個人的にはなるけれど、初めてのべたように、六十歳に手が届くまでも生きさせてもらった身として、あの時非業ひごうにかけがえのない生命を断たれてしまった多くの周囲の人達、それに私としては別して自分の教え子たちの、当時まだ年はもゆかぬ少女の身でありながら、大人も及ばぬ沈着さを見せ、あの極限状態の下で、澄み切った心境で身を処し、人に接した、人間としてまさにあつぱれとも言べき言動を、一つでも多く今のうちに後の世に語りぬのが、課せられた任務であると思つたからである。いや、任務だの、使命だのといえは言葉が勇ましいが、これは一つの私の執念というべきかも知れない。(後略)

夏空に 夾竹桃の 紅燃あかえて

八月六日 また来らんとす

亡き魂に いかなる言ことか捧ぐべき

死なずて今日に逢ひしこの身の

(二) 妖光を浴びて より (広島・衣川舜子)

はげしいかけろうのように、まだ熱気のゆらめきのぼる焼土、焼瓦の上を、わが踏む足の爪の色まで赤紫に変わるかと疑いつつ、一步一步よろめきたどる。白島の電車道では、いくつかの半焼死体を見た。男か女かもむろんわからない。

思い出す。昨日生徒に手をひきたてられてここを走りぬける時、私と二メートルと離れぬ所で一人の中年の女の人が倒れた。力尽きたように身を崩しながら、それでも顔は上へ向けていた。

「ここで転けたら死ぬるんぞお！」

脇を駆けぬける男の人がどなった。しかし手を貸そうとはしなかった。私もその人と同罪だったのである。

これらの死体は、ほとんど路傍に放置されたままだったが、あるものは「これも兵隊じゃないか？」などと銃身でころがされながら、下士官らしい人の手帳に書きとられていたりした。それはもう完全に真黒こげで、そういえば全体の恰好が材木とは違う。人間みたいだ。という程の姿だった。

「六人戦死のところ」などと、板片にチョークで書いたのが立っている松林のあともあった。

この道で、私は最初にもっとも哀れな実話の一つを聞いた。

この焼瓦の、ぼっぼつと余炎に熱いその下に、若い娘さんが焼け死んでいるのである。五十くらいの母親であるが、郡部の工場へ挺身隊で行っている娘が、その朝少し気分が勝れぬといっていたので、本人は押して出ようとすることを。

「お母ちゃんが心配だから頼むから今日だけ休んで」

と言って無理に休ませ、自分は隣組の奉仕作業で外に出てピカに遭った。ふしぎに自分は怪我もなく、娘の安否を気づかかって飛んで帰ってみれば、家は潰れて下敷になっている様子。呼べば答えがある。

「お母ちゃん！ここよ。早く出して！」

その声の見当をたどって探そうとするが、畳の下になっているらしく、——普通では考えられぬことだが、原爆の場合には、一瞬に屋根と床が逆になることも、いくらもあり得たのである——女の力ではどうにも引っぱり出せない。思いなしか呼ぶ声が次第に細る。

悲しいかな！ 親と子が、畳一重の上と下に居ながら施すすべもないのである。みすみす時を過ごすうちに火の手はまわる。下の娘もパチパチという音にそれとさとしてか、「お母ちゃん。もういいよ。早くにげて！ ただ水が一口ほしいなあ」

現在の母としてこれを聞く心。断腸のおもいと言うもなお言い足らぬであろう。

更にいたましいことには、この母親には他に二人の男の子があつたのだ。中学生でどちらも勤労奉仕に行っていた。

「ほかに子供が居なかつたら、何でわたし一人逃げたりしましよう。あとの子らが戻った時わたしが死んでたんではかわいそうと思つたばかりに……。その二人とも帰ってきません。どこかであんな風に（半やけの死体を指して）なつているんでしよう。こんなことなら、こんなことなら、あの時、あのままで『お母ちゃんも一緒よ』言うて、上と下とて呼び合つて焼かれたら、さびしくもなかつたらうに……。一人で、焼けて、なんぼか、やねこかつたらう……」

ぼろぼろぼろぼろと落ちる涙。

拭いてあげようか。抱きしめてあげようか、と思つたが、結局どうもしてあげなかつた。そういうことをとやかく考えるだけ、私は冷たい人間だつた。

近所の人らしい男の人が来て、その相手役を引受け「それは骨になつとるなあ」という様なことを言つて、掘り出しに手を貸しそうな様子なのを幸い、機をつくつて私は去つて来てしまつた。

### (三) 呉線車中

(広島・衣川舜子)

広島から呉線で行くと、矢野駅は三つ目である。車中は人いきれでむれかえるようだが、窓から入る夜気は冷たい。

「お子さんをおたずねですか」

と、隣席の婦人に声をかけてみる。こうして同車している人々は、そのほとんどが行方知れず生死も不明の近親を、毎日日さがして歩いている人達なのである。

「はい、一中へ通わせていた子ですが。今日で五日、足を棒にして探しあるきまして……」

すると脇でこの会話を耳にした中年の紳士が口をはさむ。

「わたしはねえ、すぐにわかりましたよ」

「はあ？ あの、御無事で……？」

婦人の眼は瞬間複雑にきらめく。

「いやいや、みんな骨ですよ。わたしは下の子一人連れて山梨県の方へ行つてたんです、帰つてみたら、ちゃんと家の下にそろつていました。家内のと、子供二人の分と、はつきりわかりましたよ」

ガンと打ちのめされたように、みんな息をのんで、一語もあとに続け得なかつた。

「あなたは？ やはりお子さんですか」

「いえ、わたしのは、教え子です」

「ああ、生徒さんですか」

しかしその言い方は、決して「なんだ生徒か」というような冷やかな響きではなかった。件の婦人も紳士も、教え子をなくした師たるものの胸中を察し得るものの如く、しみじみと同情の心持をあらわして、どうか是非、一人でも探してあげて下さいと言ってくれた。肉身の愛情だけしかわからぬような人達ではなかったのである。

その後も、駅やその他の待合場所などで、問われるままに同じことを語ったが、感心にも私の触れた限りの人達はみんなそうだった。中には更にくわしいいきさつを聞いて、

「いや、それはあなたの罪ではない」

などと、本気に慰めようとしてくれる人もあった。生徒達が死んで、教師が生きのこった心苦しさを、胸痛いまでに思いやってくれているようにみえた。猶、そうして探して歩かれることはいい功德ではあるけれど、頭の傷は用心しなければいけないから、あまり無理はなさらない方がいいなど心から注意してくれる人もあった。

こうした行きずりの親切ごころは、その場限りのものだと人は言うであろうけれど、受けた身はそれによって、その時

だけでも心がなごめられ、疲れすらもうすぐ思いで、それがまた次の行動の原動力にもなるものだということを、この短い車中でもつぶさに教えられた気がしている。

#### (四) 短 歌

(広島・衣川 舜子)

生徒！

焼跡に 骨ありと聞けど われ遂に

行きてみざりき 行かれざりけり

求むれど 父母は来まさず 師も添はず

気絶えゆきしか 煙に咽せびて

教へ子たちのみたまに

額ぬかづくも 空そら々しかり 汝なが魂たまに

「夢安かれ」と 我は得云はず

臨終いまわには 汝な等が名呼ばんか 生き生きて

この身の果ては いかにもありとも

# 大野陸軍病院にて

(広島) 酒井喜代子

私は当時二十三才、日赤北海道支部看護婦養成所を卒業した後、病院船勤務を経て二十年五月より後輩六名と共に、広島県の大野陸軍病院に召集で勤務についておりました。この病院は国鉄広島駅より門司方面に五つ目位のところで、大野浦駅で降りて二十分位行ったところの、山裾に階段状に建てられた白亜の瀟洒な建物の結核療養所でした。

その朝は一日の暑さを思わせる晴れた日でしたが、前夜当直だった私は同僚と二人、宿舎に引揚げ、座ったと思うのと同時に体が二、三米ふわりと移動した感を受け咄嗟に空襲と直感、黒い合羽をかぶって防空壕に飛びこんだのですが、先にも後からも誰も来ないので「ン」と思っ出てみると空にきのこの頭のような大きな雲が昇って行くのがみえました。患者さん達がサンルームの窓に鈴なりになってワイワイガヤガヤしていました。玖波の火薬庫が爆発したのだらうと言うようなことで、その日は平常の勤務で終るかにみえました。日没頃、女の人が乞食のようなポロポロの着物を着て「広島

の人は皆死んでしまつて、生きて逃げてきたのは私達三人だけだから助けて呉れつて……」何の話かしらと思つているところに、宿舎にいる者は全員小学校へ救護に出るようにと本部より指令がきました。救護所なる小学校についたところ、近く迄貨車で運ばれてきて、そこから歩いてきたという方達がすでに行列していて、ほとんど裸、少しばかりの布切がベルトにぶら下つていて、頭髪が熟れたとうもろこし色に申し合せたように逆立っていました。顔は男の人か女の人かやつと解る程度で、炭坑から今出てきましたといった状態でした。燈火管制下の玄関に小さくした電燈が一つついていて、軍医さんが一人いらつしゃいました。患者さんの背中一面にガラスの破片が吹きつけられている人が多く、座らせてあげる事も出来ず赤チンをつける位のこと、次、次、と交替するのですが、行列の中から「ドサツ」と倒れて動かなくなると兵隊さんが来てその人達を講堂に運んで行くのですが、収容された方達もベットらしいものがあるわけではないので、机の下だったり廊下だったりでした。水、水と云われてそばへ行つてあげようと思つても、その手前にいる人に足をつかまれて、それを先に行つていよううちに、静かになつてしまつて……。この夜の作業が終つて宿舎へ帰りついたのは翌朝十時過ぎでした。

次の日から娯楽室勤務を割当てられました。病院ですので

手術室では深夜迄手術があった様子ですし、娯楽室の外にも下士官集会場、病理試験室、兵舎等にも収容しました。一枚の毛布を四つ折りにして枕一つ、シーツ一枚が一ベットとなり、このベットとベットの間の十センチ位のすき間を看護婦が通り、食事を運ぶという状態で、娯楽室には百名収容という事でした。その時の食事はどんなものだったか今は想い出せないのですが、村の婦人達が交替で奉仕して下さったように記憶しています。二、三日前迄は元気だった軍人さん達です。すから、がちりした体格で礼儀正しく、静かに横になつていらつして、用事がある時は恐縮しながら申し出る状態ですが、静かだナーと思っていると、こと切れていることも多うございました。こゝでは前から結核で入院していた回復期の患者さんが、作業服に着替えて自発的に手伝つて下さるようになり、私達が霊安室へ担架を運ぼうとすると「行きましょう」とさつと交替して下さり助けて頂きました。霊安室は病棟から離れたところにあつたのですが、室内に収容しきれなくなつた遺体は、この道の両側に次々と並べられていき、顔を覆っている形ばかりの布は目の部分が大きくふくれ上つていました。それは腐敗して発酵したガスが眼球をおし出しているのです。氏名もわからず、親族にもみつけ出されず、黑板に亡くなつた数を示す正の字が、いくつも書き加えられて行きました。そして早朝より兵隊さん達によって筵むしろで巻いて、

大八車だちぐるまに積まれ山の向う側で茶毘たびに付される日が続き、瀬戸の夕なぎの暑さの中で、その臭がよんでいました。

四、五日もすると娯楽室もそれなりの段どりが出来てきましたが、患者さんの中から奇声をあげて叫び出す人が出たり、「隣の人が私の悪口を云うから注意して下さい」と云う人が出てきましたが、それは蛆むしが湧わいてクチャクチャ音がしているのです。眼にも蛆むしが湧わいてクチャクチャ音がして粗末なピンセットで一匹つまみ上げると外ほかのはパツといなくなり、少し待つて二匹目という具合でしたが、それが一人や二人では無いこともあり、毎日蛆むし虫との格闘が続きましたが、それは「やがて」の予告でもありました。この勤務が始まつた何日かは白衣に白い靴で勤務しておりましたが、一日着ると「明日はとても」という事になり、洗濯等する余裕もなく、宿舎用のモンペをはいたり、緋の上着を着たり、頭は三角巾さんかくちんでしばり、決められた物以外は「もつてのほか」の場所でした。が咎められる事ありませんでした。

八月十五日の天皇様の玉音放送は、遅い昼食に行つた時、炊事の小母さんからラジオがピーピーいってよく聞えなかつたけど「戦争は終つたらしいヨ。」と教えられ、泣き出したことを覚えております。或る日こんなことがありました。炊事の小母さんが、「今日ね、アメリカが視察に来るんだけど若い人達はさらわれるとこまるから、かくれていなさい

ね。」と教えてくれましたが、恐いものみたさで、のぞいてみましたら顔の真赤な大男が、ガワツガワツと靴をならしながらやってきましたが、先頭の人の靴が歩くたびに獅子舞の頭のように大きく口をあげ、上着もズボンもポロポロに垂れ下っていたので、アメリカもやっぱりと何かほっとしました。

この頃から体調がおかしいと気付いていたのですが、欠勤を申し出る状態でもないし、皆そうなんだからとロボットのよう動いただけで涙を流すことも、笑うことも忘れた時間が過ぎて行きました。靴は自分のものをはいて出勤しても、いつの間にか、藁草履わらぞうりだったり男物の靴になったりで、すれた腫からネバネバした汗が出るのですが、これがいつ迄も治らずに困りました。

この年の広島地方は春からの長雨だったようですが、九月中旬になり朝晩は秋を感じるようになってきた九月十七日の夜半のことでしたが、枕崎に上陸した台風が私達のおりました大野浦を直撃しました。病院の裏の山に病院に給水する為の貯水池があったのですが、これが決潰けっかくして山津浪になり、病院の中心部と本館が、山陽本線の線路を越して海迄押し流されてしまいました。私達のいた娯楽室は病院の中央にありましたので、あつという間の出来事でしたが、当直に当たっていた同僚も殉職し、病院全体の死亡者は一五六名と記録されており、手元の資料によりますと、九州地方の死者不明

者の四四二名に対して広島県は二〇一二名となっておりますことは、大野陸軍病院の死傷者が多かったことを示していると思います。被爆してこの地迄のがれ、束の間の休息を得た方達の最期のことを知ってほしいと思います。

病院が一夜のうちに無くなってしまい、九月二十日、生き残った患者さんは船が迎えに来て柳井陸軍病院へ転送されて行きました。倒壊した建物とサイの川原のように大きな石のゴロゴロしたところを看護婦四人で担架を運び帰ってくると休ませても貰えず、「次」「次」この頃になると兵隊さんの姿もあまり見かけなくなり、一番よく働いているのは私達だけに思えてきて、北海道の両親のところへ帰りたいと思うようになってきました。

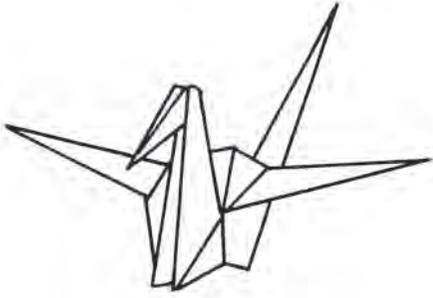
捨てる神あれば拾う神ありで、病院の下の方を通っていた山陽本線が、土石流で埋ってしまい、九州からの復員列車が通過出来ず、兵隊さん達が毎日沢山作業に出て線路を修復しているのが見えていました。救護所になっていた小学校への往復に、そこを通っていた後輩が私に「あの列車の隊長さんが、こゝが開通したら北海道迄直通で帰っていいという許可を貰っているから、看護婦さん達も一緒に帰っていいという許可をヨって……だから本部と交渉して下さい」と云うので「駄目だと思っけど行ってくる」と申し出ましたところ、あつさり「いいですよ」「復員証明書は何枚ありますか。」とい

うことで、米と牛缶を渡されました。（お金は貰えませんでした。）

（兵隊さんと一緒に乗せて貰えた列車は、窓は外側から板が打ちつけてあり、座席は背もたれ一杯迄梱包されたものが積み上げられていて、私達はその上に座られました。）

これは特別の好意で、あとの連結車は無蓋車<sup>が</sup>で、夜はシートをかけて横になっていた兵隊さんもうらっしゃいました。青森駅についたのは、五日目位だったと思います。七名無事に生還出来たことを感謝しております。

最後に、大野陸軍病院及び原爆で亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈りし、二度とこのような惨禍が起らない事を願って、私の証言を終らせていただきます。



## 「あの日」

（長崎） 宅 島 ミヨ

今年も又八月九日が巡って来ました。「あの日」です。私は長崎県立高等学校専攻科二年に在学中で、西山町の学校の中にある寄宿舎から学徒動員で旭町の三菱電機の工場へ行つて居りました。いつものように皆と一緒に寄宿舎を出て大波止の棧橋へと向いました。船で対岸の工場へ渡るのです。途中まで行くとサイレンが鳴り出しました。警戒警報がでたのです。空襲警報になると大変です。あわてて寄宿舎に引き返しました。でも警報はすぐ解除となり又工場へと出かけました。汗だくになりながら小走りでした。その時又警戒警報のサイレンです。仕方なく寄宿舎に帰りました。その中に警報は解除になりましたが行ったり来たりでくたくたになったので、皆と話し合い舎監の先生に話して今日は全員休むことにしてそれぞれの部屋にはいりました。まだ昼前なので私は針箱を出して縫い物を始めました。

すると飛行機の急降下の音、同室の石丸さんに「おかしいね。警報も出てないのに」と言いながら私は出窓の外に出て

空を見上げました。その時、強烈な光が一瞬空全体に光りました。「何でしょう」と二人で隣の部屋へ行こうと廊下に飛び出たとたんに爆風、何がどうなったのかわからず気が付いた時、もうもうとした土ぼこり、ガラスの破片、壁土、板きれ等の中に二人で伏せていました。額のあたりが濡れているので手で触れると血がべっとり、ハンカチで押さえ、階段をかけ降り早く防空壕へと皆で走りました。学校の中は通れない有様でした。校庭の崖の途中に作られた横穴防空壕についてみると、あたり一面どの家もこわれています。その時は原子爆弾とは知らず、どこにどんな爆弾が落ちたのだろうと思いましたが。壕の中にはいるように言われ薄暗い横穴の中にはいり誰もただ黙って座っていました。どのくらい時間が過ぎたのかわからなかったのですが先生から外に出て良いと言われ外に出ました。

山のむこうは火事です。大波止の方からも煙が上っています。空からは黒くこげた紙きれの様なものが降って来ました。寄宿舎の部屋に帰り何も持って出なかつたので防空頭巾や貴重品入れの袋を探しました。あらためて部屋を見ると天井に穴があき、窓の戸は枠ごと飛ばされ畳までめくれています。手がつけれない有様です。少し片付けた頃お昼ごはんのおにぎりが出来たからとの知らせで食堂に集まりました。それまですっかりおなかの空いたのも忘れていました。おにぎり

を持ったとき右手の腕が痛いのに気がつき、みると小さな傷があり、あとでわかったのですが「ガラス」の破片がはいった傷で破片を取るのに三回も切開手術をすることになったのです。

夕方になって負傷した長崎高女の本科生が伊良林小学校に運ばれて来ているので迎えに行くように言われ、四人一組で担架を持って出かけました。学校につき体育館の中にはいると、息がつまりそうでした。血だらけ、服はボロボロ、火傷で顔がはれ上がり目鼻もわからない人、背中が紫色になり皮がむけた人、異様な臭い、泣き声、うめき声、助けを求めると、騒然としています。やっと長崎高女の生徒を見つけ担架に乗せて学校へ帰りました。夜は横穴の防空壕の中で土の上に座ったまま一夜を過しました。次の日も飛行機の爆音が聞こえると壕の中へ逃げる、寄宿舎と防空壕の往復でした。

学校の外の様子は何一つわからないし、夜は又壕の中でした。皆家に帰りたいと泣き出す人もでて舎監の先生に家に帰してくださいと頼みました。十一日の朝になって校長先生より帰れる人は帰っても良いとお許しが出ました。でも乗物は何もありません。徒歩で諫早まで行けばその先は汽車が動いているからと聞いて皆で歩く事にしました。

お米をもらってリュックに入れ水筒、着がえ等持って学校を出ました。浦上の方は通れないので矢上の方から行くこと

にして馬町から螢茶屋の方へ向いました。その時海軍のトラックが通りかかり、どこまで行くのか聞かれました。そして大村まで行くからよかったですら乗りなさいと言ってくれました。皆「ワーよかったです」と叫びました。何日もかけて諫早まで歩く覚悟はしていたものの本当は心細く思っていたところでした。日見の長いトンネルを抜けると、青い海と緑の田畑が見えました。暑いのとトラックの荷台の揺れで皆ぐったりしていました。諫早に着いたのは三時すぎた頃でした。大村・佐世保、佐賀、島原方面へと帰るグループに別れました。私は島原へ帰るのですが、本諫早からでないと切符が買えないと言うので一駅だからと歩きました。駅に着くと列車は出たあとで、夕方の最終列車まで待たないと言われました。夕方までの時間のたつのがとてもおそく感じられました。列車はおくれて来ました。その上もう諫早からの人で満員で、通路にすわるのがやっとでした。途中の町で友人達は降りて島原に着いた時は夜もふけていました。改札口を出ると歩けないほど疲れていました。駅前にある人力車の待合所に行き人力車に乗せてもらい家に帰りつきました。人力車に乗ったのはこの時が最初で最後でした。今はなつかしい思い出となりました。

でも私には「被爆」の苦しみが待っていたのです。家に帰ったその夜から高熱がでて病院へ行っても手当の方法もわ

からないし、薬もないとの事。その上長崎から帰った人は十日ぐらいで死ぬと噂もあり、いつまで生きていられるのかと毎日思っていました。そして空襲警報のサイレンが鳴っても、もう防空壕へいく元気もなく爆弾が落ちたら死ぬだけだからと母を困らせました。

やがて終戦になり平和な日々がおとづれました。電燈はまぶしくこんなに明るかったのかと思いました。九月も半ば過ぎてようやく元気になったのですが、又いつ被爆による障害がでてくるのではないかと不安な月日を送りながら今日まで生きのびて来ました。

「原子爆弾の恐ろしさ 戦争のむなしさ」  
今の若い人に知ってほしい、そして今の平和がより長く続くことを祈ります。



## 父・母を捜して

(長崎) 田 栗 末 太

私は被爆者手帳をもっているが、直接の被爆者ではない。被爆者遺族というべきかも知れない。昭和二十年八月九日、長崎市松山町の我が家には両親が住んでおり、父は三菱兵器製作所で働いていた。私は十九才、旧工専生として久留米の学寮にいた。一年余り続いた学徒動員の後、九月の卒業（理工系は六ヶ月繰り上げられていた）と十月軍隊への入隊を前に最後の授業が行なわれていた。

長崎に原爆が投下された八月九日の翌日、久留米で見た新聞には「落下傘つき新型爆弾、長崎に投下、損害軽微」とあった。そこで私は長崎の両親宛に見舞の葉書を出して返事が来るのを待った。しかし来る筈はなかった。「損害が軽微でない」ことが伝わって来て、長崎に行くことになり久留米を発ったのは八月十三日の夜であった。前日の空襲で破壊された三百メートルの筑後川の鉄橋を手さぐりで歩いて渡った。八月十四日朝浦上駅に着いた。子供の頃から見慣れた金比羅山、岩屋山そして稲佐山も、美しかった緑がかき消されて、

すべて茶褐色に焼けただれていた。浦上駅から松山町まで途中の家はすべて焼きつくされ、瓦礫の道を歩いた。原爆投下後五日が過ぎていたので、人間の死体は殆んど見られなかったが、馬や犬の死体が道端に散乱していた。それらの死体は縫いぐるみの玩具のようにふくれ上り、足を宙に向けて横たわっており、異臭が鼻をついたことを忘れることができない。

私の家は松山町郵便局の隣であったので、傾いたポストが唯一の目印で、この辺に私の家があった筈と推定された。しかしそれ以上に何の手がかりも無かった。その後父が働いていたと思われる三菱兵器、大橋工場そして市内の親戚と両親の消息を尋ね歩いたが何も判らなかつた。焼け跡で偶然会った小学校の友達の「この辺にいた者は全滅だ」という言葉だけが耳に残ったが、私には両親が必ず何処かに生きていると思われてならなかつた。

八月十五日朝、この日が終戦の日となることも知らず私は又家の焼け跡に行った。そして両親の手がかりを求めて焼け跡を掘った。灼熱の太陽が照りつける中で懸命に掘った。「あった！」見慣れた父の茶碗であった。壊れているがその絵柄は確かに父が使っていたものであった。何故か救われたように嬉しかった。最初の両親の手がかりであった。之に力を得て掘り進んだ。そして遂に見つかった人骨。真白に焼け太陽の熱で温かい。忽ち一人分位の骨を拾った。それは私の

家の台所の付近であり、母の骨に間違いないと思った。そしてやはり母は比処で死んだのだと観念しなければならなかった。今爆心地の碑が建っている所から五十メートル位の所である。

「ピカッ・ドーン」と共に家はつぶれたことであらう。そして家の下敷になった母は必死に助けを求めたかも知れない。でも誰も助けてくれる人はいない。その中に何処かで火事が起り火の手が迫ってくる。母はそれまで生きていたらうか。家が爆風でつぶれた一瞬の間に圧死していたかも知れない。むしろその方が苦しみが少なかっただらうと思う。

「母のものらしい骨」を拾ってから私は父を捜し歩いた。長崎市内、諫早、久留米、本籍地（南有馬）の間を何度か往き来し、風の便りを手がかりに知人宅などを尋ね歩いた。しかし確かなことは何も判らなかつた。今も片足鳥居の残っている山王神社の近くの三菱兵器で爆死したのではないかとの噂をたよりに、そこで茶毘だびに付された遺骨の中から一体を戴いた。本籍地で両親の葬式をして貰ったのは被爆から一月以上経っていた。しかしその後もある日突然父が元気で帰って来るような気がしてならなかつた。

戦争、そして原爆は私から両親を奪い殺した。そして親しかった幼な友達も――。原爆の詩を思い出す。「父をかえせ／母をかえせ／（友達をかえせ）／にんげんをかえせ／そし

て平和をかえせ」

最後に二十九万五千余名の原爆犠牲者のご冥福と平和をお祈りして「私の証言」を終ります。（尚右の文中の両親は私を幼児の時から養ってくれた叔父夫婦であつた。平成三年十一月）

（平成十四年十月左記を追加）

## 短歌

焼跡に 漸く拾ひし 母の骨

その温もりを この手忘れず

人繁くなりたる 被爆の地の底に

行くえ知れざる 父の声きく

卒業の 名簿にはなき 友の名を

被爆殉難の 慰霊碑に見る

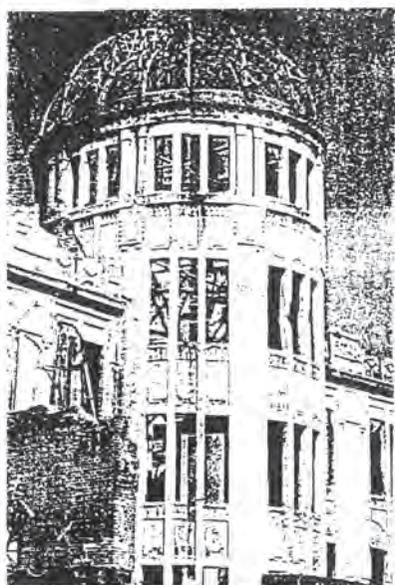
## オレンジの色が

(広島) 谷 永久江

私が被爆したのは爆心地から二、二キロメートル離れた家の中である。五才の時の夏でした。その日は良く晴れたとてもいいお天気でした。私は姉と二人、お茶の間の出窓でお人形さん遊びをしていた。窓から外を見るとオレンジ色の光が走った。とても綺麗ねといって姉と私は眺めた。その時、近所の家に汲み取りに来ていたおじさんが、手を眼にあてて、あわてて逃げていたので、私も姉も共に外へ出ようと立ちかけた時、水屋（食器戸棚のようなもの）が倒れた。私は難のがれて外へ出ることが出来たが、姉は水屋の下敷になり、額に傷をした。その傷は薄くなってはいるが、今も残っている。母は外にいた。防空訓練の通り、目と耳に手をやり、地面に伏せた。目と耳は無傷でしたが、背中と手と顔は火傷を負い、熱い熱いといって苦しんでいた。家の前に、二帖程度の防火水槽があったので、前の家のお姉さんに水をかけてと頼んでいた。福田さんのお姉さんは水をかけると死ぬから駄目よといっていたが、母は死んでもいいからかけてといい、何

杯も何杯もかけてもらっていた。町内で五人程、火傷のひどい人がいたので、入院することになった。入院といっても、病院ではなく、歩いて五〇分くらいの所にある大河小学校の教室が病室になっていたのである。一教室に二十五名ぐらいの人がいたと思います。入院した五人の中で母が一番重病であると近所の人が言っていたのを私は聞いた。そして、お医者さまもだめだろうとのことであつたが、三才上の姉が看病の為、母に付き添い、一番火傷のひどい背中に、蛆虫がわくので、ピンセットで毎日毎日とっていた。取っても、取っても次から次へとわくので大変である。蛆虫の為に一人ずつ入院している人も減って行くのである。子供心に私もお母さんは今日は大丈夫であろうかと心配で顔を見るまで安心が出来ませんでした。母方の祖母が一週間に一度のわりで、とりたての魚を持って来ては、焼いたり、煮たりして、食べさせたのと、蛆虫を取ったので、母は奇跡的にも命が助かった。私は週に一度、中学三年生の長兄に連れられて、母の所へ行つた。母の所へ行くと丁度お昼頃なので、兵隊さんが、コーリヤンとキビのごはんのおにぎりを配ってまわっていた。私は、そのおにぎりを食べることが出来ない（私にはとてもまづく感じた）ので、もらわないでいると、母が兄さん（家で留守番をしている三兄）のため、もらっておいでというので、私は兵隊さんの後を追って、もらった記憶がある。当時食物

がなかったので、そのおにぎりはご馳走である。でも、私はいくらお腹がすいていても食べなかった。私か食べたいと思うのは、祖母が持ってくる魚である。一度私も食べたいと思うと、祖母は「だめだ」といって食べさせてくれなかった。それ以来、魚も祖母も好きでなくなった。母の部屋から、外を見ると火の手が上がっていた。私は火事だというと、母は死んだ人を火葬にしているのだと説明したように思う。私の家には兄が三人いる。次兄は当時中学一年生でした。学徒動員で、勤労奉仕に出ている、鶴見橋の近くで、被爆し火傷のため、眼が見えなくなり一人では歩けないので、声をはりあげて、自分の姓名と住所をいい、家まで連れて帰って欲しいといっていたそうです。それを近所のおばさんが、ご自分のお子さんを探しに行きご自分のお子さんは見当らなかったけれど、次兄を見付けて、家まで連れてきて下さいました。……が、火傷は治ったのですが、一年後には亡くなりました。父も出勤途中で被爆して、家に帰ってききましたが、被爆後、身体の調子もおもわしくなく寝ていました。五十才後半頃より健康になりましたが、七七才で死去、母も父のあとを追うように、五ヶ月後、家の中で轉んだのが原因で足を痛め、入院三週間目に七七才で亡くなりました。私が視力が弱いのは、あの光線のためだと眼科医に言われ、早く気がつけば治せたと聞かされた時、少々残念に思ったが、ピカッと光った「オ



レンジ」の綺麗な色は、今でも私の目に残っている。

## 「祭りの場」

(昭和五〇・八・六)より

(長崎) 林 京子

(筆者) 昭和五年長崎生まれ、昭和二十年八月九日、県立長崎高女在学中、長崎にて被爆、その体験をもとに作家活動。昭和五十年「祭りの場」で群像新人賞及び芥川賞を受賞、その後「上海」で女流文学賞、「三界の家」で川端康成文学賞、「やすらかに今はねむり給え」で谷崎潤一郎賞を受賞。桜山在住。つばきの会会員としてもご協力。

### (一) 祭りの場 より

原爆搭載機は爆音を消し滑空によって飛行し、長崎に潜入した。昭和二〇年八月九日一〇時五八分である。

私たちはA課の事務室にいた。他に工場長、片腕の次長、鹿兒島から来た女子挺身隊員の山口、合計六人である。

ステンドグラスや色ガラスの窓は浦上に向かって開いている。窓から一〇米ほど離れた場所に煙突が三本立っている。畳二枚敷はある太さで高さは二〇米ほど。前はコンクリートの広場である。

広場で、高等学校の学徒が円陣をつくって踊っていた。仲間が出陣するのだ。踊りは出陣学徒を戦場に送る送別の踊りである。その頃連日、学徒たちが出陣していった。コンクリートの殺伐な工場広場は彼等の祭りの場になっていた。

広場で出陣の踊りを踊っていた学徒らは即死、火傷の重傷者は一、二時間生きた。爆圧でコンクリートに叩きつけられて腸が出た学徒がいた。若者だけにうめき声がすさまじかった。逃げる途中声を聞いた友人は、今でも話すとき両手で耳をおおう。

爆心地の屋外で即死した者は多くが爆圧による死亡、とある。

踊りの輪には大学生も混り四〇人はいた。無言劇のように物悲しい学徒出陣の踊り――

出陣する学徒を輪の中央に立てる。仲間の学徒がこれを囲む。送る学徒は肩を組み輪で囲む。輪のリーダーがヨーオツと声をかける。輪は右にゆらぎ全員左足をあげる。くの字にあげる。

地に着いた右足をトンと拍子づけて踏む。左足をおろす。左右こうごに繰り返えし僅かずつ輪は右に回る。時おりヨーオツとリーダーが調子を揃える。右に移動するとき学徒たちがはいている下駄が、ざらついた音をたてる。木と石がすれあう響きのない音は、打ち返えしのない片男波のように空しかった。

私はたびたび踊りの輪にぶつかった。そのまま通りすぎる事が出来ずに立ち止る。中央に直立する見知らぬ学徒の武運を祈って目礼する。眼が合うと白タスキをかけた学徒は見つめ目礼を返えした。

## (二) 二人の墓標 より

(長崎・林 京子)

——ミッシヨンの女学生さんが、教会の下敷になった尼さまば、助けようと、燃えよる建物に駆け寄ったら、来ては駄目、いいから早く逃げなさい、って叱りんさったげな。

尼さまの服に火のついて……女学生さんは、泣きながら逃げたとげなですよ。可哀そか、どんげん気持ちでござんしたろうか。年端もいかん娘さんが——

隣の部屋で、おばっちゃんが話している。

尼さまの、偉かお人ですね、とつねが鼻をすすする。若子の

蒼いほほに、微かな笑いが浮んだ。

そんな話ほうそ——若子は秘かに、つぶやく。おばっちゃんの話は、繕われた美談で、真実ではない。あの日N市は、浦島太郎のおとぎ噺のように、白けむりにかわる閃光によって、一瞬の間に死人の街にかえられてしまった。その中からやっとひろった命である。誰が駆け戻ってまで助けたりするものか。他人をかまう余裕など、なかったはずだ。

逃げ帰った女学生は、見すてた尼さまが目さきにちらついで、嘘を繕って親に打ちあけたのだらう。女学生は、自分の善意を信じたかったのだ。繕われた話は、おばっちゃんを感じさせ、つねを涙ぐませ、もっと大勢の、善意の人々を涙ぐませるだらう。

日が経つにしたがつて、嘘は女学生の体にしみ込み、女学生自身も、それを信じるようになる。その時はじめて、女学生は尼さまからときはなされる。

無意識のうちに若子も、好に嘘をついたように、いつか洋子との事実を都合よくゆがめて、おばっちゃんや、つねに話すかも知れない。そして洋子のことを忘れてしまいたい。

その日が早く来てくれるといい。

おばっちゃんの話嘘と定めつけながら、一方では、それが本当かもしれない、と若子は思うのだ。

長い髪の女学生を見うしなうまいと、若子はおそい足で、一生懸命に走った。ときどき女学生は炎に包まれて、よろめく。その都度その少女の背なか、カメレオンの甲冑のように色をかえて光る。炎が赤ければ、炎に赤く似せ、青く短かい、馬や人間が焼ける炎には、冷たく光ってみせる。

人間の背なか、なぜ光るのか、とりとめなく考えながら、若子は走る。何回も死体につまずいて、死体の上に腹ばいに倒れた。息絶えたばかりの死体は柔らかく、肉は内側から押し返す弾力をまだ持っていた。

若子は、死んだ人間がこわかった。胸に当る柔らかい肉や匂いに、胸がむかついて、げえーと間ぬけた声を出して、その場に吐いた。

そのうち、多すぎる人間の死に、こわさを感じなくなった。肉の柔らかさにも慣れた。

肉の柔らかさ加減で、男か女か、若いか年をとっているか、つま先で判断できるようにもなった。

肉から骨までの弾みが相当に厚く皮がやわらかい、若い女、十六人目。男、年より。骨が固く、肉が薄い、九人目。無意識に指を折って数えながら走っていく。同情は感じない。

ただ死体だと思っていたものが、つまずいたショックで気づき、クスリば、と薄目をあけて見あげたとき、若子はおそろしさに、息をのんだ。あきらかに死にかけている、九割方

は死んでいる人間が、なおかつクスリを欲しが、生命への執着が、息をのむほどこわい。若子は、何となくまだ生きていられる人間をさけて逃げた。

前を逃げていたカメレオンの少女の背なかに、太陽の光がさして、煙が僅かに切れた。

避難所に指定された山の裾に、若子は立っていた。



## 忘れないで下さい

(広島) 宮川 千恵子

私は当時広島市舟入国民学校の五年生で、学童疎開をする学年でした。八幡村の農家の納屋を借りて、畳を敷いた六畳の一部屋に、母と私は、箆笥や家財道具といっしょに疎開しました。

広島市は夜の空襲が多くなり不安な日が続いていました。あの前夜は父と次兄は舟人の家を留守にして、私の所に泊りに来ていました。八月六日の朝早く、二人は広島に出かけました。次兄は学徒動員で兵器廠へ向う途中でしたが、丁度カーブした土塀にそって歩いていて、六千度という熱線は免れましたが、建物が崩れて下敷きになり全身を打撲しました。父は郊外電車で己斐駅に着き、市内電車に乗り替えるために並んでいたのです。三人前までで満員になり、次の電車を待っていました。三人前までの人達は全員焼死です。父は暗れ渡った青空に、三つの白い落下傘を見つけ、何だろうとリュックを片手で肩にかけ、空を見上げていた瞬間でした。従って顔と胸と片手に火傷を負ってしまいました。それ

から父は己斐の山に向って逃げ、回りの負傷者を助けまし助け合って、山を越えて八幡村に向って逃げ帰りました。山の中で下唇が何かわずらわしくて、手でつまんではらうと、皮がぶら下っていたものらしく、下唇がむけてしまったり、手の傷から察して、顔の様子を石の凹みに溜っていた水にうつして見たりしたそうです。夕方五時頃だったでしょうか、父は村に着くと先ず医者へ寄りました。第一番目の被爆患者として手厚い治療を受け、ガーゼを顔にはってもらって包帯を鼻に横一文字に巻き、手は三角巾で肩から吊って帰って来るではありませんか。私は遠くから父を見つけて走り寄りながら、高い鼻がとれてしまったのかと思いましたが、近づいてもとびつくりしました。火傷が痛々しいのと、父の声は異様な事態を伝えていました。村の人々が父の話を聞きに沢山かけつけて来て、個々の肉親の安否を尋ねました。父はひどく興奮していて、広島は全滅だと説明していました。続々と父に続いて被爆者が逃げて来て、八幡村の人口が増えると、次に爆撃されるのではないかと子供なりに考えて、それは非常に恐い思いをしました。父は息子を探しに今から行くというので、そんな体で行っちゃだめだと云うと、この位は傷のうちに入らない、きつと息子は動けなくなっているか死んでしまってるかと心配して火傷の痛みなど感じていないようでした。三人の不安が高まって来る中、夜八時頃、リリンリリ

ンと遠くの田舎道から自転車を鳴らしながら次兄が帰って来ました。次兄は広島市中を、火を逃れながら逃げる途中全身火傷の友人に呼びとめられ、その友人を戸板に乗せて四人の友達で担いで市内を横切り、救済のトラックにあずけてから友人と別れて帰って来たのです。私の一家はひどい目に会っても、その日のうちに帰ることが出来て、本当に運が良かったのです。

私はこの日、五・六年生は、山に木を切りに行く作業日でしたが、ひざに数個の大豆くらいのおできが出来ていて作業を休んでいました。もう一人作業を休んでいた女の子と、二人きりで教室に残り本を読んでいた。二人は教室の広島側の一番前の机に座っていました。八時十五分の何秒か前で、丁度原爆を投下したB 29が頭上を通って帰って行った飛行音が耳に残っていたその時、ピカッと光りました。女の子が「何？」と言ったので「翼に太陽の光が反射してまともに、こゝに当たったのだ」と考えたか言ったか「ドーン」と、ものすごい音と共に、ガラスはメチャメチャに机の上にかぶさり、二人が気付いた時は教室の後にいました。まだガチャガチャと教室の廊下側のガラスが廊下に落ちている最中でしたので、全部落ちるまで危いから待とうと女の子を私は抱きしめました。次の瞬間二人は、ころがるように二階から駆け下り学校の防空ごうに逃げました。一・二年生が頭や顔にガラス傷で

血を出しながら泣き泣き逃げて来ましたので私は先生を手伝って下級生の世話をしました。やっと落ち着いて、校門まで出た所で、慌てて私を迎えに来た母と会いました。家は納屋ですから、窓といっても木の戸をはずせば障子ですが、障子の骨も折れてなくなり電球の傘もふっ飛び、窓の外に下っていた窓より大きいすだれが家の中に飛び込んでいました。

母は目の前の山の上から七色のきのこ雲がムクムクとふくれ上った、今迄見たこともない光景を、一気に話してくれました。時間の経過は記憶にありませんが、そのうち広島の黒い空からパラパラと紙切れや灰が降って来ました。父や次兄や長兄の嫁や親戚の心配をしながら、広島の何処がやられたのか、手がかりはないかと、母と私はゴミ拾いに畑の中をあつちこつちと走りまわりました。銀行の通帳の半焼けや、襖紙や書類や、かなりの大きさのものや、放射能を含む灰やゴミとも知らず、一所懸命に拾い集めて、文字や地名のあるものは、母に判断してもらおうと。しかし、母にも見当がつかみませんでした。母と私は家にじっとしていられず、ゴミ拾いをしてよごれた雨にも会ったそうです。五日市は広島かきしの風下で、三日三晩ゴミが飛んで来ました。

次の日からは医者も父より重症の被爆者で埋まり、学校も避難所になりました。父の顔はだんだんはれ上り、わずかに開いた口のすき間から、少しずつ重湯などスプンに入れてあ

げたり、うちわで扇いであげたりして看病しました。つきつきりで家族が見ているので、ウジ虫は湧きませんでした。父の火傷は狭い部屋に悪臭を放っていました。兄は高熱を出し、赤痢のようなはげしい下痢に悩まされ、次いで私も熱を出し、きつと母も体調を悪くしたと思いますが、二人を死なせてはならぬと必死で看病しました。私自身は恐怖で毎晩全く眠れないので、眠らないから熱が出るのだと信じていましたが、母は私が腹をこわして熱を出していると思って、庭に新聞紙を敷いて、その上に排便させて医者に見せたりしました。私は学校へ行って被爆した子どものお守りもしました。頭の火傷をガーゼで包帯した二才位の男の子をおんぶしたりして世話をしました。昭和五十三年、母を私達が世話をするようになって、母の思い出話の中で、あの時私になついていたその子を、私がおもちゃとくれないと母を困らせたもんだと言っていました。親からはぐれた、負傷した幼い子は沢山いて皆施設に運ばれたそうです。母を困らせた事など私は忘れていましたが、その男の子の事は、よく覚えてあります。医院の回りの木影には、焼けたゞれた皮ふをぶら下げて、スイカのようになん丸にはれ上った顔をした人々がゴロゴロ寝ころんだり、座ったまま伏したりして苦しむ人が沢山いました。

広島市内には多くの親戚がありますのでその安否も心配でした。終戦になって敵が上陸して来ると殺されると思い

込んでいた私は、気丈な母と二人で舟人幸町の家へ行きました。どういう方法で何処を通ったのかは覚えていませんが、馬の死体があったり、電線がやたら乱れていた記憶があります。我家一帯は全焼していました。縁の下に入れておいたのか、少し掘って埋めてあったのか皿やコップは全部溶けてくっついていて、何一つ持ち帰れるものはありませんでした。その時大きな家だと思っていたのに焼けて土地だけになるとこんなに狭いものかと、空しく思ったことを覚えています。舟入川口町は家は崩れていても焼けなかったので義姉は無事でしたが、茶箆の前にいたので背中に沢山のガラス傷を負っていました。その後、原爆の惨事は会う人毎に話され、それが何ヶ月も何ヶ月も続きました。古江の知人からこんな事を聞きました。古江までやっと逃げて来た人々の中に苦しみの余り、寸時目を離したすきに、たち物鉢をのどに突き立てて自殺してしまい、それを見つけた時は鉢がピクピク動いて突立っていたと。義姉も逃げる途中で目が見えないけどどうなっているかと尋ねられ、見ると眼球がぶら下がっていたので「ちょっと外傷しておられます」としか言えなかったと。

父は一時的に元気になり十二月末に呉線の小屋浦へ引越しました。父は会社に通っていましたが、いつの日か寝たり起きたりになってしまい、相撲取りの双葉山にそっくりと言われていた程の体格の良い父でしたのに、歯ぐきが化膿したり、

肺や腸やと様々な病名をつけられて三年後には死亡しました。死の前日の事は、私は今もはっきり覚えています。便が出なくても出ないからと、母が父の腹をそろそろさすっていましたが、さすり方が気に入らなくて父自身がひどく腹をさすった瞬間「腹が痛い」と苦しみ出し、血便がドロドロ出ました。腸内出血です。私は息を切らして医者を呼んで来ました。ひどい痛みと出血に医者は次々と注射をしました。父の容態は悪くなりもう最後だと察しました。家族に見守られ、医者もつきつきりで一夜が明け、空が白んで来る頃、激しい呼吸の間から「泣くな」「泣くな」と二度言って、皆のすすり泣きを聞きながら息が切れました。その時、私が握っていた父の手が握り返したような気がしました。人の死に初めて直面した私は、死亡後硬直してしまうと父の手が離れなくなるかと、思わず手を離そうとしましたが又握ってあげました。父の手はすぐ力が抜けて、離すことが出来てほっとしたことを、父には申しわけなく思い出します。そして家族の皆が原爆からの三年間の力がどっと抜けて泣き崩れました。

当時は原爆症の研究は未熟なものでしたし、家族と一緒に居たいという父の希望から入院もせず、現代のような精密検査も血液検査も出来ないまま、死因は化膿性腹膜炎何とかと長い病名をつけられています。紛れもなく原爆に殺されたのです。広島市の平和公園の慰霊碑には、父の名はあります

いが、私は大船の慰霊碑の中に父の名を刻みました。浜中延吉です。

あれから四十六年、私はいつまでたっても癒えないものを感じます。それは何時でもワーと大声で泣き出せる気の狂ったような恐怖の感覚が私の中に潜んでいます。時々恐怖の発作のようなものがこみ上げるのを堪こたえると、のどの両脇からクーツと頭が痛くなります。又當時を思い出すと、自分の間憂うつになって、今の平穏な生活の中に自分の気持ちの置き場のないような不安な浮き上りを感じます。これが私の原爆後遺症です。医者には問題にされないこの種の原爆後遺症は被害者意識という言葉で片付けられてしまっています。

国は二十年間、原爆被害の実態を公表することを禁じて来ました。語り伝えなければならぬといわれるようになった今も、被爆者は多くを語ろうとはしませんが、耳を傾けて下さい。広範囲に、しかも一瞬にして、熱線と爆風と放射能とで幾十万という多くの生命を奪った核兵器の残酷さを忘れないで下さい。

## 弟への鎮魂

(広島) 山田和子

私は昭和二十年五月、新しく出来た第二総軍司令部に動員され、一番爆心に近い兵舎の二階の暗号室に勤務していました。その日、部屋の中央の席についた途端バツという異音と鋭い閃光と共に頑丈な兵舎は一瞬にしてくずれ、踏んでも、踏んでも奈落の底へ落ちて行きました。

勤労奉仕の女生生の「お母さん！助けて！」と叫ぶ声が聞え、あ、空襲だ！とうとう広島もやられたんだと、私も、心の中で思いました。やっと足が地に着き、真暗闇の中でうめき声や、泣き声が一ぱいで修羅場のようにでした。顔に手をやると髪は逆立ち、右手の肘辺りから血が流れています。そのくらいで、私の周りには幸運にも空間がありました。が、こ、へ閉ぢ込められてもう出られないのか、死ぬ外ないのかとあせりました。何分位経ったであろうか、一筋の光が見え、誰かが、こ、から出られるぞ！と叫びました。

私は夢中で、その方にはい出して、山のような瓦礫を下りました。あたりは薄暗い夕方の感じで、私は皆について、二

葉山の方へ駆け出しました。あっちこちから逃げて来た人もみな、山の方へ逃げ、また、敵機が来ると最後だから牛田の方へ逃げよう等、口口にいつて山を越えて行った人も大勢ありました。

兵舎の方を振りむくと、もう火の手が上り、ああ、何人が出られなかったのかと思ひ、ここに立っているのが信じられませんでした。雨がパラパラと降って来ましたがすぐ止みませんでした。今からどうなるのだろうか、私は司令部の兵隊さんらしい人のそばで、ジツとしていました。あたりは怪我人や倒れている人で一ぱいでした。司令部が二葉山に急造りの小屋を建てそこに移ったのは、午後も大分経った頃でした。室長の中佐殿は無事でしたが、同室の方で、最後まで姿を見せない方々が沢山おりました。すぐ東白島町の我が家へ帰ろうと申し出ましたが、危険だからと止められました。

日が暮れると、市街のあちこちから火の手が上り、メラメラと一晚中燃え続けました。小屋には避難者が一ぱいで次々と死んで行き、その度に泣き声が高くなりました。私は家族はどうなっているのか心配で眠れぬ夜を過しました。

七日、家に帰ることが出来ました。兵隊さんや沢山の遺体を、よけながら歩きました。欄干のない常盤橋を渡り、通信局の手前の家にたどりつきましたが、門柱だけ残り、きれいに焼け落ち、あたりは見渡す限り焼け野ヶ原でした。私は呆

然と佇み、無事に皆、逃げられたらどうかと、近所の人を探し、聞いたところ、父と一才の姪は、家の下敷になり、すぐ火の手が廻って悲しい最後を遂げ、母と兄嫁は水源池の方へ逃げたこと、家に帰って来た弟は、ひどい火傷で、後から母を追って行ったことなど知らされました。私は大声で泣きながら、光明院河原の方へ降りて行きました。被災者は流れの中まであふれていました。そこで知り合いの兵隊さんを見つけ、その方は水を下さい下さいというのもやつとで、私は川の水を飲ませて上げましたが、頭から上半身血のりがベツトリで、目も血走っていてその凄惨さに私は又来ますねと云いながら、再び行く事が出来ませんでした。早く水源池へ行かなければと、足袋蹴の私は熱い道を跳びはねるように走りまわした。道々の焼け落ちた家の下の方は、燠あきになって赤々と燃えていました。昨日は逃げ惑う人びとで一パイだったでしょうが人っ子一人見当らずシンとして不気味でした。

中一の弟は建物疎開の勤勞奉仕で袋町あたりで被爆したのです。整ちゃん整ちゃん必死で、呼びましたが、余りにも多い人々は上流に向って霞のようにも見え、ジツとして動かず、顔は変りはて、弟はこゝに居るのだろうか、私は恐しさでのぞき込む気力も失せ、ジツと立ち盡していました。後に風の便りに、弟が水源池で川に口をつけて水を飲んでいたら聞きましたが、そのあとのことは誰も知りません。九月の暑

い日、母と私は諦めきれず、水源池を訪れました。清い水の流れは静寂そのものでした。母は可愛想なことをした。さぞ待っていたらうにと泣き続けました。私もあのとき、もつと探してやればよかったと、涙を流しました。

四十数年も、すぎた今も弟は中学生姿のまま、頬笑みかけています。あの頃から今まで長かったようで、又アツと云う間とも思はれ、朝晩佛壇に手を合せる時、いつも両親、弟、小さい姪の顔を思い浮べ、身変りになつてくれたのかとも思い今迄の無事を感じています……。

当時広島市では、市の中心街と鉄道の沿線の建物疎開をして居りました。その後片付けに男女中学生がかり出されて居りました。その場所が爆心地に近かった為、先生と共に全滅したのです。先生が生徒をかばつてかぶさるようになって亡くなつて居られた、とも聞いて居ります。弟の同級生は当日病気で休まれた方が、たった一人生存していらつしやるそうです。その方も淋しい思いをして生きて来られた事でしょう。

今年の八月四日の明け方、私は始めて弟の夢をみました。弟は小綺麗な木造二階建の病院に入院していました。私は下からしきりにのぞき込んでいましたがやがて部屋に入りますと、弟はとても元気そうでニコニコと御機嫌でした。そして、背中火傷は直つたよ、果物が食べたい、と申しました。顔も綺麗でニコニコしていますので私はよかつたよかつたと思

いました。それだけです。目が覚めてもとてもさわやかでした。私は弟の冥福を祈ってこの証言を書きましたが、八月六日を二日後にひかえ、弟はもう大丈夫だよ心配しなくてもい、よ、と、報告に来てくれたのだと思います。やっと天国について安らかになったのだと思います。



## 「被害は軽微なり」

### 西部軍管区司令部発表

(長崎) 祐野孝文

沖繩は米軍によって占領され、ソ連参戦、広島に原子爆弾投下、戦爆連合の敵機は連日、連夜の如く襲来し、戦場と化し、次は本土上陸決戦と戦局は次第に悪化していた。昭和二十年八月九日、運命の日、遂にB 29長崎に地球で二番目の原子爆弾を投下。私は17才で中学4年。大村航空廠に学徒動員中だったが、その日は、休んで、生家の田圃の草取りをしていた。警戒警報が発令されて、間もなくB 29が重い爆音をなびかせながら「ブーン、ブーン」と長崎方向へ飛んでいった。例の如く偵察飛行でもしているのだろうかと思っていた矢先、「ピカッ！」と一瞬、地球が破壊されたのではないかと、思うような、異様な黄色い光線が稲妻の如く走った。ドーンと物凄い爆発の轟音の後、爆風が過ぎ去った。

長崎の上空を見ると、黒煙の茸雲の間から、落下傘が二筒落下してくるのが見えた。高射砲陣地から砲火を浴びせていたが、命中せず、隣の田結村に落下して行った。(この落下傘は、無線装置で、原爆を長崎上空580メートルで爆発させた

もの、投下後52秒で爆発）爆風で燃え上がった紙屑が、西風に流されて無数に飛んで来て、被害の大きいことを知った。

午後2時15分、西部軍管区司令部はラジオで次のように発表した。

敵大型機2機は、長崎市に侵入し、新型爆弾というものを投下せり。詳細は現在調査中なるも、被害は比較的軽微の様なり。

事実は、長崎は全滅状態で手がつけられないと、情報が入り、道路は着たきりの服で逃れて、避難して来る人、負傷者を運ぶトラック等で夜通しごった返した。魔の9日は、明け、母と2人で喜々津駅より、道の尾駅まで、汽車でゆき、それから先は、線路伝いに歩いて、浦上地区の城山町迄、悲惨極まりなきこの世の地獄と化しているのを確認した。爆心地の浜口町の叔母一家7名は全員被爆死、城山町の叔父は養鶏場で黒焦げになり、次女の小学6年は防空壕の中で、叔母は横穴防空壕の中で助ったが、爆風と大量の放射能を浴びて、食事はとれず、全身腫れ、お茶だけ飲んでいたが、一週間後に他界した。長女は女学校2年で、三菱兵器に学徒動員され、当日は耳の治療に長崎医大に通院中、被爆し、行方不明、応急救護所になっていた勝山、新興善小学校を探し回ったが、今だに不明のままとなっている。

46年も経過した今も、当時の悲惨な状況が、つい昨日のよ

うに生々しく蘇ってくる。浦上川には、多数の被爆した人々が、電車の中や道路にはゴロゴロと真黒く焼け死んだ人、馬車馬は立ったまま焼け死に、言葉では表現出来ない、むごたらしさ、真黒く焼けただれた子供が、悲痛な声を出して、「お母さん、お母さん、お母さん」と泣き叫び、助けを求めていた姿が今も脳裏から、離れることがない。

私は30才で白内障を患い、2年間は殆ど失明であった。両眼共に手術して恢復したが、裸眼では不自由である。原爆放射能の後遺症は、今なお、多くの人人の体をむしばんでいる。尊い平和の礎となられた原爆犠牲者の御霊に应えるために、即時核兵器を廃絶し、全人類が、平和で幸福な生活が出来るよう、願ひ、訴えるものです。

原爆忌 平和を願う 千羽鶴

## 「ブラジルに行こう」

(「祭りの場」より)

(長崎) 林 京子

島原から救援に出た稲富に逢ったのは翌一〇日である。避難先の合戦場に稲富はたずねて来た。合戦場はなだらかな丘陵地で、ビードロを塗ったハタアゲ大会で有名だ。十人町の人たちは一〇日夜合戦場に避難した。下宿に行き、私の避難先をたずねたのだ。

一〇日朝浦上に入った稲富らは死体収容にあたった。白骨化した遺体は焼け跡にそのまま置き、黒こげ死体と全裸の火傷死体は焼跡に並べた。頭を中央にして車座に置く。探しにくる家族がすぐ見つけられる合理的な並べ方だ。一つ一つ見つけてあるく必要がない。

夢中で働き一休みするため段々畑に腰かけて、稲富は背筋が寒くなった。成仏を祈りながら並べた車座の円型が、大地を腐食していくカビに見えた。

稲富は山の斜面に私と並んでねて、昼間の浦上の様子を話してくれた。夜霧がおりて頭が冷える。寒くないか、と聞い

た。稲富にわかるように、私は首をふった。稲富は腕を伸し私の頭をのせた。

稲富が収容した遺体にN高女生が一人、いた。兵器工場から浦上まで逃げてきて動けなくなり倒れた。日での道路の真中に、仰むけに倒れていた。三つ編の一方がほどけて衣類は焼けて全裸である。手も足も肉がはがれ、時おりヒックと指がつる。まだ呼吸はしていた。顔に傷はなかった。肌がろう人形のように透いて半びらきした眼が哀れだった。

稲富は上着をぬいで少女の体にかけた。片足に運動靴をはいていた。内側にN高女名と姓が書いてある。

稲富は手拭いを裂き焼跡の炭を水にしめして、少女の姓を書いた。しっかり少女の手首に結んだ。死は時間の問題だった。トラックの水を持って行くと、もう死んでいた。

少女は荒木という。私の学年にも数名いる。私が知っている荒木は学年で一、二の美人だった。髪がウェーブしていて肌が磁器のように透明だった。焼け跡の少女と該当するが、被爆後、私たちの肌は一樣にろう細工のように透明になった。荒木は地方の医師の一人娘と聞いた。その人かどうか。

合戦場の空は一面星くずである。小粒の星がちかちか揺れる。稲富に逢えて私は感傷的になっていた。小粒の星の、たよりな気な光りが、荒木や私の多くの友人たちのように思えるのだ。父にも母にもみとられず死んだ心細い少女たちの死。

私は始めて涙ぐんだ。

浦上のおびただしい死の中で、私はロボットのように無感動な少女になっていた。

浦上方面の空は昨日に続いて赤く染っている。寒くない？

と稲富が重ねて聞く。稲富は寒い、と震えていた。突然、

「戦争が終わったら二人でブラジルに行こう」と言った。焼け跡も、死人も沢山だ、と言った。「歩けないかもよ」と言うとおぶってあげるよ、と言った。私は合戦場まで歩くのがやっとだった。下痢が続いていた。

私は稲富の腕の中で身をまるめてねた。夜空に爆音がする。敵機来襲、敵機来襲、国防団の人が小声でふれあるく。

朝、太陽が昇りはじめると稲富が水を汲んで来てくれた。井戸だから冷たくて気持がいいよ、と鉄カブトのふちを唇に当てて飲ませてくれる。汗どめの皮に稲富の体臭がする。健康な青年の陽なたくさい汗の匂いである。水と一緒に稲富の匂いを飲んだ。被爆後はじめて「生きている」と感動した。

稲富に背おわれて合戦場をおりた。季節より早いつわぶきの花が、草かげに咲いている。陽ざしが強く、稲富の首筋に汗が流れている。舌を伸してなめると塩気のない汗だ。

「汗が甘い」

「なめたの？」と聞き、風呂に入っていないから汚ないぞ、と

背中をゆさぶった。

その後一週間稲富は焼跡で寝起きしながら遺体収容した。

母校の医科大学に近寄るのが怖い、と言った。自分一人助かった幸福が後めたい、生きてくれるといいが、と合戦場を降りて行った。

私は縁側の柱に寄りかかって雲の流れを眺めていた。芋掘りに出かけた母が帰ってきて「稲富さんが入院したらしいよ」と言った。高熱が続き今朝入院した、と言う。

昼すぎりヤカーに乗せてもらって、私は稲富を見つけた。傷はなおりつつあっても歩けばうずき出すので、その頃外出するのはリヤカーに乗った。

稲富は想像したより元気で、やあ、と手をあげて挨拶したが、看護婦は「十分ですよ」と面会時間を切った。熱のため眼が赤くうるんでいて息も荒い。病状は見かけほどよくなかった。見ていると稲富はあごに力が入らぬようである。食物を噛み切ることが出来ず、あいうえおと明瞭に発音できない。話しても唇が常時半びらきの状態になっている。原因は不明である。

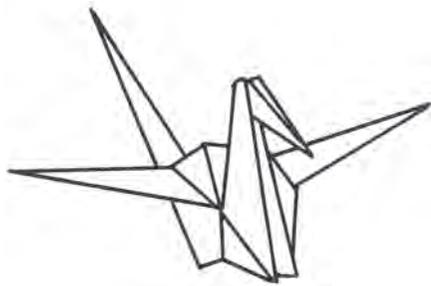
「塩分が不足しているんですよ、熱いおかゆにゴマ塩をたっぷりかけて食べれば、じきなおりますよ」稲富は気軽に話した。

「本当にブラジルに行くぞ、いいね」稲富は母と私を等分に見て言った。

「歩けないかもよ」合戦場と同じ答え方をすると稲富は笑った。

「おぶってあげるさ、いいでしょう？ おばさん」曖昧に母が笑った。青海苔を和紙の上で気のままに焼き、手のひらで揉み、ゴマと塩を混ぜ、とびきりうまいゴマ塩を稲富のために作る約束をし、私は帰った。ひさびさの外出のせいで私は発熱した。その夜稲富は死んだ。

九月二三日夜一時、台風の前ぶれの雨が降り出していた。



## 昭和万葉集 より

子と母か 繋ぐ<sup>つな</sup>手の指 離れざる

正田 篠枝

二ツの死骸 水槽より出ず

その朝を 出でて帰らぬ 面かけの

松尾 富雄

幼きままに 来る原爆忌

生きながら 焼かれ給ひし ちちははを

福田須磨子

思へば今も 涙たぎり落つ

戦争の 悲惨は今も 続きいて

津村寿美子

被爆女性の 今日いのち断つ

水<sup>みづ</sup>欲りて この川に死にし 人いくばくぞ

大塚 初枝

今宵万灯は 静かに流るる

殉教の 浦上におり 被爆者の

秋月辰一郎

いきがたきいのちと 今日むかいぬ

## 地獄絵の中を駆け巡る

(長崎) 伊崎善明

昭和二十年八月九日午前十一時二分、私は旧制佐賀高校一年の動員学徒として長崎北方約三十軒の川棚海軍工廠疎開先工場で魚雷の部品を運んでいた。その時原爆の閃光を目にし、さらにドーンという音を聞き、ついで長崎と思われる南の空高くきのこ状の雲がわき上るのを見た。

広島が新型爆弾でやられたことは聞いてはいたが被害の程度ははつきりわかっていなかった。長崎もその新型爆弾だろうと心配しながらも被害の状況を確かめようもなかった。

ところが宿舎に帰ったとたんに「長崎へ救援隊として急行せよ」とのことで、その日の夜私達動員学徒約二百名は海軍の人達と一緒に上陸用舟艇で川棚から大村湾を南下し、時津港に上陸、浦上近くの三菱兵器住吉町地下工場に辿り着いたのは翌日の午前二時頃だった。途中長崎方面より歩いてくる人々に会ったが、着物は焼け落ち、髪はばらばら、怪我は手当することなく、裸足のままで歩く姿は真夜中のことなので男女の区別もつきかねる程だった。町の中心部に近づくにつ

れ樹木や電柱は中心部に向いた方が焼けて燃えくすぶっており、道路わきには人馬の死体も散見されるようになった。これは大変なことになったと思いつながらトンネル工場の機械の間で暫しの仮眠をとった。

翌朝は早くから救援活動を開始、夜の間はよくわからなかったが爆心地に向って行くとその惨状は目をおおうばかりでとても筆舌に尽し難いものだった。見渡す限りの焼野が原、瓦礫の山で、道路そばには人や馬の死体のごろごろ、特に馬の死体はガスが充満しハチ切れんばかりになっていたのには言葉も出ない程であった。

救援活動では、負傷者の救出と手当を担当することとなり、二人か三人でチームを組み、火傷用の薬と包帯をもって爆心地附近を一日中歩き回って数多くの負傷者の手当をした。

負傷者といっても殆ど瀕死の状態でその人達の「熱い、早く手当をして下さい」「水、水を飲まして下さい」という声は何十年も経った今でも耳に残り、忘れようとしても忘れることが出来ない。「瀕死の人に水を飲ませるとそれが引金になってすぐ死ぬ」と聞いていたが、残り少ない水筒の水を飲ませたものであった。然しその後はこちらも飲み水がなく「水、水」の声に何もしてやれなくて身を切られる思いがした。こんな状態の中で持参した薬品類は一日で全部なくなり、翌日からは負傷者の運搬、死体の火葬、埋葬の仕事を日没ま

で続けた。作業を終え暗くなって帰る頃、あちらこちらで火葬の赤い炎、青い炎がたちあがっているのが妙に美しく感じられたのはどういう心理状態だったのか今もってわからない。とにかく救援作業中の状態はこれまでの想像を絶するものでまさに真夏炎天下の地獄絵そのものであった。

後にして思えばこの原爆で佐高出身で長崎医大在学中の先輩五十余名が犠牲になられたのであるが、その当時はそんなことを知る由もなく、ただ無我夢中で頑張ったものだった。

同窓会名簿には、この犠牲者の方々は単なる「死亡」でなく「原爆死」と明記しており、その頁を見るたびに今でも心が痛む。

また出身中学の先輩、同期生で長崎医専在学中の数名も原爆の犠牲となられた。いずれも優秀な人達で前途有望な身を一瞬にして奪われてしまった。私にとって身近かなこれらの人々、さらにすべての原爆犠牲者の方々に対し合掌してその冥福を祈るのみである。

足掛け五日間の救援作業を終え八月十三日夜川棚着、翌々日の十五日は終戦の玉音放送を聞いて口惜しさと安心感が入り混じりしばらくは放心状態だった。

家に帰ってから約一週間は原因不明のひどい下痢に悩まされた。後で級友に聞くと同じ症状がおこり、白血球が急激に減少した為、一時休学の止むなきに至ったものもいた。

結婚後、妻に長崎での救援活動、二次被爆のことを話したところ、私の後遺症や子供への遺伝についての精神的負担や苦痛は大変なものであったとのことである。

幸いにして子供三人を無事出産、その後順調に成長したものの、やはり同じ心配や精神的苦痛は尽きることはなく、今後とも原爆の影響を考えると憂うつでならない。

被爆の状態は極めて悲惨であり、救援作業も非常に苛酷な状況にあったが、その中でも心なごむことがいくつもあった。

その中の一つ、八月九日真夜中、時津港に上陸し爆心地に向けての夜間行軍は、疲労と眠気のため声もなく黙々と歩いていたが、たまたま私達の隊列には若い海軍軍医が入り私達を「医者のお卵」と思ったのか、親しげに学生時代のことや軍医の任務のことなどを話し、「大変なことになったがお互いにしっかりやろうや。」と激励されたことは今でも忘れることが出来ない。

その二、救援作業三日目、私は許可をもらって長崎市内の探訪にでかけた。市内には親戚が三軒あり、その安否を確かめる為だった。幸いにして親戚の家は爆心地をはずれた南部地区にあったのでいずれも皆無事であり、突然の訪問を心から喜んでもらった。そして「あまりにも大きい被害を受けた地元の人々は呆然自失、何から手をつけたらよいかわからない位打ちのめされている。こんな時に他地区からの救援活動

は本当に有難い。よく来てくれた。有難う。」と何度も礼を言われた。

その三、救援作業最後の日、川棚海軍工廠長官が救援作業の視察と激励に見えられ、私達に対し「こんなひどい作業をさせたのに皆さん達は頑張ってよくやってくれました。厚くお礼申し上げます。」と深々と頭を下げてお礼の言葉をのべられ、寸志としてウイスキー二本を頂いたとの事である。私はその場にいなかったが後でそのことを聞いて五日間の苦労や疲れも一度に吹き飛ばような気がした。

然しこのような出来事やささやかな喜びも、原爆被災や救援当時の事を思うと忽ち雲散霧消し、あらためて原爆の悲惨さが思い知らされる今日この頃である。

また毎年、大船観音寺の原爆被災者慰霊祭に参列した時には、なくなられた方々へ手を合わせ、「核兵器もない、戦争もない、平和な世界」を祈り、また長崎の平和公園及びその周辺を訪れた時は、五十数年前の「その時」を思って、鎮魂、慰霊の念を強め、無核、平和を念じ、その為の行動を起すことを誓っている。

## 忘れえぬ長崎の事

(長崎) 近藤敏子

あの日も今年のような暑さでした。昭和二十年八月九日私は空襲警報解除と共に、防空壕から出て、三菱兵器製作所の職場に戻りました。職場は爆心地から一・二キロメートルの地点にありました。

仕事を始めて暫らくすると、ゴーというものすごい音と共に砂煙が上がり、私は、思わず体を伏せました。どの位の間に気絶していたでしょうか。「助けて、助けて」という叫び声で気がつく、あたりはシーンと静まり返り人の気配はありませんでした。逃げ出そうとしましたが、建物の下敷になり足首がこわれた机に挟まり抜けません。時間が経つにつれ、じりじりと痛んできます。棒切を使って、足を抜こうとあたりを見回しました。下敷になってもまだ生きている人が何人かいました。私は長崎高女報国隊の人に声をかけました。彼女は胸が板に挟まり苦しがつていましたが「手は、動く。」と云って棒切を取ってくれました。私はそれを使って、抜く事が出来ました。彼女も助かりました。次々に何人かの人も

脱出することが出来ました。他に助けを求めている人はないかと、工場内を見まわりましたが、工場の破壊がひどく私達の力ではどうする事も出来ませんでした。助けを呼ぶ叫び声が今でも耳に残っています。

生きながら焼かれ逝きにし

学徒らの助け呼ぶ声耳に残れり

母と弟達はどうしているかと心配になり、先輩と二人で松山町の方へ向かいましたが、道は通れず鉄道線路を通って帰りました。あちらこちらで火の手が上がり、火が髪の毛にせまってきました。火を払いのけながら走りました。城山町に近づくと町全体は火の海で、近づけません。仕方なく川のそばを通り、大橋の方に行きました。帰る途中被爆した電車があり、車中の人々は、皆窓から顔を出したまま死んでいました。人も馬も立ったまま死んで居り目玉が白く飛び出してしまいました。川の中には水を求めて飛び込んだであろう人々が、大勢死んでいました。夜は長崎市商の近くの土手で寝ました。

翌朝、母と弟妹を探そうと、先輩と別れて歩き出しました。三菱兵器大橋工場に学徒動員でいついた上の弟とばったり会うことが出来ました。弟も工場で被爆して気絶していたそうです。友人に助けられ山を越えて逃げてきました。弟と

二人で城山町に入ると、そこはこの世の地獄と化してしました。家の付近に行くと思われる白骨の顔が道路にころがっていました。そして目印につぶれたバケツをのせておきました。知人から下の弟が八幡様の川ぶちに居ると聞いたので、夢中で「義ちゃん、義ちゃん」と呼びながら、まだ火の残っている灰の中を防火用水に足をつけては走りまわりました。弟は外がボロボロになった真白いおにぎりを大切そうに持っていました。その弟も十歳の幼なさで「死んだがまし、死んだがまし」と苦しみ抜いて終戦の日に亡くなりました。

翌日上の弟と二人で母と妹をさがしに行くと、母の骨もなくなり、六歳の妹も看取る人もなく淋しく死んで行ったものと思われまます。そして、この日を境に私は一時期、感情もこわさも失い、涙も一滴も出なくなりました。砂漠と化した焼跡に沈んで行った真赤な大きな太陽を今も忘れられません。でも私達にも明るい光がさしました。それは暫くして兄が復員して来た事です。

父は大分県出身です。私は京都市右京区竜安寺で生まれ、毎日お寺や川で遊び楽しい日々をすごしていました。

父の転勤で昭和十一年、長崎市城山町に転居、その年五歳の妹が亡くなり、三年後に父が病死しました。二十年に母、下の弟、妹が原爆死し、長崎は忘れたくとも忘れ難い所です。八月九日が近づくと大声でわめきたい、どなりたい思いが

します。又地震が来ると、震度一でも下敷になるのではと逃げようとしみます。今も残っている後遺症でしょうか。戦争も、原爆も、嫌です。



## つらかった死体の焼却

(広島) 鈴木健次

のちに爆心地と成った広島街、相生橋附近を私が初めて見たのは、昭和十四年四月、第一回目の召集で中支方面派遣で、宇品港からの乗船待ちで、広島を中心街に分宿した時であった。綺麗な水の流れる二俣の川に、Tの字の大きな橋のある美しい風景が強く印象に残っていた。

昭和十八年、陸軍兵長で帰還後、元の勤務先横須賀海軍工廠造船部に復職したが、翌年第二回目の召集で、横浜紅葉坂の東京船舶隊橋本隊に入隊、兵舎は東神奈川浦島小学校で、毎日穴掘りや防空壕造りであった。

戦局は本土決戦に備え、千葉県鋸山の本橋の本橋隊と合流した五八八名は、広島に結集七月二十九日、宇品の船舶司令部に到着した。

八月六日、警戒警報が解除後、私が内務班に入った瞬間、電灯線から火が噴き、爆弾が数個一度に爆発した様な爆発音とともに私は床に伏せた。暫く辺りが静まるのを待ち、営外に出ると、市街は燃え、黒煙がモクモクと空高く立ち昇って

いた。管内は忽ち騒然さわぜんとなった。

その夜九時過ぎ、救援隊が編成され、第三小隊伏見伍長第一分隊と鈴木兵長第三分隊から各四十名が選ばれ、十時司令部を出発した。

一面焼野原の暗闇の瓦礫の街を黙々と市の中心へと進んだ。随分歩いた様な気がしたが、足場が悪くなり、その場で夜営となったが、あたりの悪臭に眠れぬ一夜を過ごした。

夜が明け、持参のにぎり飯で朝食を済ませ出発、見覚えのある橋が見えてきた。ここが爆心地であったことは誰れも知らない。

「午後には、古材と油が届くから、直ちに作業にかかれ」と引率の少尉は命令を残し、足早に去った。屍の街の真っ只中に残された私は伏見伍長と顔を見合わせ、暫く、途方にくれた。

死体の一体々々を運搬する作業は、はじめのうちは手間どったが、午後には三ヶ所に累々と山のように積まれた。

少尉が帰り、別の場所に移動を命じた、そこは、西練兵場だった。見渡す限り広場一面、隙間も無い程死人がゴロゴロと重なり合い転がっていた、衣服は焼け焦げ裸同然で、なかには炎天下に風船のように体の二倍も腫れ上がったものもあった。

腐触した遺体の耳や口から蛆がポロポロと転がり落ち作業

は難航した。日没まで作業を続け、一日目は終わり、太田川の川岸で体を洗った。

二日目からは、作業も馴れ、二人一組素手で死体を運んだ。遺体の破損がひどく死体の山も崩れることもあった。七、八ヶ所に積まれた死体の山に古材と油をかけ火葬した。遺骨は、バケツで運び、穴を掘り埋めた。作業は何日間続いた。練兵場の死体は片付けられ、大鳥居と櫻の大木の残骸が残っていた。

最後の作業は、救護所近くのコンクリートの廃墟の中に投げ込まれた死体の焼却だった。暗室の中にうず高く積み込まれた死体の山は崩れ、床一面真黒い死人の油が流れ異臭を放っていた。これ迄以上につらく悲惨な作業であった。

八月末司令部に引揚げた。本橋隊は既に解散し、残務整理が数人残っていた。何日振りに入浴し、新しい服と毛布、そして私は伍長の階級章と軍隊手帳を受領し、隊員を連れて司令部を後に広島駅に向かった。

## 私の8月6日

(広島) 堤 達 生

そのとき、爆心地から一、五キロの千田町一丁目に住んでいた。

前年の夏休みに東京市中野区桃園第三国民学校から、単身縁故疎開でそこへ来ていたのである。政府の方針で決まった学童疎開は三年生以上が対象であるが、集団疎開か縁故疎開かの選択肢があった。私は迷った末、父母の生まれ故郷である広島市への縁故疎開を選んだ。

昭和二十年に入ると太平洋の島々を次々と占領した米軍は日本本土に空から襲いかかってくる。空襲は大都市から中小都市へおよんできた。在学していた広島市大手町国民学校でも、春ごろ県内の田舎への疎開が始まる。私にとっては再疎開となるが、先生の勧めがあったものの、なぜか気が進まず八月になってもぐずぐずしていた。五年生であったが、クラスの中でまだ数人が残留していた。空襲は直撃弾さえ受けなければ大丈夫などと高をくくっていた。

八月は本来夏休みの筈であったが、その年は夏休みがな

かった。しかし学校に行っても授業はなく、校庭を耕し、通りから牛糞を拾ってきて肥料にし、芋の苗を植えたり、ポプラ(ポプラの木であったと記憶している)を切って枝を落とし木刀にしたりしていたのである。当時は米軍の上陸に備えて木刀で対抗しようなんていう、あとから考えると、おとぎ噺のような話が教師から言われていた。八月五日、隣家に住む中学生の従兄弟と木陰で話をして「夏休みだから学校へ行くことないよ」とか、従兄弟の勤労働員の話、あるいは戦争は太平洋の島々が次々と玉碎し、陥落していたので「これでは勝てるのか」「米軍が上陸したらどうなるんだ」など、不安で、希望のない、お先真つ暗な話をしていた。

八月六日は、近所の日本赤十字病院を火災の類焼から守るため、その周りの民家を強制的に壊すという、いわゆる家屋疎開の作業の真っ最中だった。壊した家屋の跡片づけをするため、隣組の指令で各家庭から一名ずつの割当てで作業に駆り出されることになっている。私は、母方の祖父の兄である元陸軍の師団長をしていた大伯父と、その妻の大伯母のお宅にお世話になっていたが、二人ともお年寄りなので、廃材の跡片づけは私が一家の代表で出るようになった。

朝からカンカン照りのその日、八時ごろ家から徒歩で四、五分の現場に行くと、すでに隣家に住む母の姉が来て作業をしている。着くとすぐに伯母は私に廃材の入れ物である箆ふるを

家から持って来なさいと命じた。当時は物資不足で、家を壊した廃材を風呂炊き用の薪として貰えるということである。私は来たばかりで面倒とは思ったが、しかたなく斧をとり家に帰った。

家に戻り、大伯母に斧を取りに帰ったことを告げると、裏に回りなさいと言われ、裏木戸から入って裏庭に回る。建物がコの字形に取り巻いているその裏庭の庇ひさしの下で、大伯母が物置から斧を持つてくるのを待っていたときだ。ブーンという爆音があったので、空を見上げた瞬間、あたり全体を覆いつくすような猛烈な爆発音があった。ドーンでもない、ガンでもない、想像を絶する、言葉で表現できない音だった。その音の中に自分がいたのだ。瞬間的に勝手口へ逃げ込んだ。逃げ込んだのか、爆風で吹き飛ばされたのか定かでないが、体を曲げ、上半身を伏せていた。大伯母が私の上から覆いかぶさってくれていた。しばらくは爆風のすさまじい風と、瓦や壊れた家屋の破片のようなものが猛烈な勢いで空中を舞っていた。例えていえば竜巻の中心にいるような状況であった。大伯母は「頭を上げては駄目」と上を見上げた私を叱りつけた。伏せている間、もう死ぬ、もう死ぬ、と思っていた。何十秒か一分以上経っていたのか。やがて身を起こしてみると、わが家は天井が落ち、ガラスは飛び散り、壁は落ち、戸は倒れ、それでも日形に建てられた比較的新しい頑丈な家

だったので、土台と柱は原形のまま保たれている。しかし外へ出てみると、近所の家々は、家屋全体が傾いていたり、崩れて倒れたりしている。あまりの凄さにしばらくは茫然としていた。いつの間にか空は曇っている。わが家は路地の突き当たりになっていて路地の両側に長屋あるいは一軒家の家作を持っていた。普段からそこに住む人たちと交際があったが、その家々から誰も出てこない。シーンとしている。どうしたのだろう。

そのとき、大伯母にこんなことを言ったのを覚えている。「これ何」「爆弾よ」大伯母は簡単に答えた。自分も爆弾が落ちたということが分からなかったわけではない。だが、現実に爆弾が落ち、そのすさまじい破壊のありさまに仰天し、これが現実のものなのか、夢を見ているのではないか、そんな気持ちで大伯母に確かめたのかもしれない。また、一回の爆弾で隣近所周囲がこれほど、ことごとく破壊されるものなのか、疑問を感じてもいた。子供とはいえ当時の国民学校生は爆弾について、焼夷弾について、空襲時の逃げ方などについて教えられていたのである。想像していた空襲と全然違うこの光景に我を失っていた。

そのうちに、倒れた家々から火の手が上がってきた。おそらく家が倒れ、下敷きになって動けなくなり、炊事の火を消せなくなったのではないか。ぐずぐずしてはられない。火

事に巻き込まれてしまう。大伯母は私に言った。「長靴を履いて早う逃げんさい。私はおじいさんを助けなければならぬいから。海の方へ逃げるのよ」

海の方（吉島のこと）へ逃げるというのは前々から決めていたことである。長靴を履けというのは倒れた家々のために路地がふさがっているのです、通りへ出るにはその上を乗り越えて行かなければならず、運動靴では危険だからだ。私は壊れた下駄箱から長靴を引っ張り出した。それまで、避難訓練とか何回かの空襲警報があつて、その都度衣料品、学用品の入ったカバンを持つて共同防空壕へ避難した。一緒に避難した人たちに小さいのにエライわね、などと言われもした。が、驚天動地で持つていくものなど全然忘れ、着のみのまま自分の家から離れた。

鷹の橋電停から南大橋へ通じる広い道路へ出てみると、驚いたことに、皮膚が焼けてポロのようにぶらさがり、黙々と海の方へ逃げていく見知らぬ人々がいる。この人たちはどこから来たのだろう。どこに居たのだろう。まるで別の世界から来た人間のような。さっきの爆弾でこんなに遠くの人たちも被害に遭っているのか。現実とは思えない白昼夢を見る思いだった。この光景は、戦後、話でいろいろと伝えられ、絵にも描かれているとおりの有様だったのである。南大橋まで来てみると、橋は半分崩れており、渡るのは危険だと迷っ

たが、迷っている余裕はなかった。火が近づいてくると危険だ。吉島海岸へ行くには渡らなければならなかった。

途中、空襲警報が鳴ったのか、敵機の爆音がしたのか、それとも黒い雨が降ったための雨宿りであったのかは覚えていないが、防空壕へ避難した。当時はあちこちに防空壕があつた。やや落ち着くと、頭から顔を經て白いシャツが帯状になつて真っ赤に染まり、体にくっつくほどの血が流れていることに気がついた。おそらく爆風で頭に瓦のようなものがあつたのであろう。黒い雨はいつとき降つた。防空壕を出ると、晴天が戻っている。さらに海の方へ逃げ、海岸まで辿りついた。

海岸のよしずばりの海の家では、怪我人が十数人寝かされていて「水」「水」と哀願していた。どこかのおばさんがやかのの水を与えている。自分も水が欲しくなり、水を飲ませてもらうと、海水だった。市街の方を振り返ってみると方々で大きな火災が起こっており、時々爆発音が聞こえてくる。おそらく、工場で何かに引火しての爆発音ではなかったか。市街へ戻れる状況ではない。朝からのカンカン照りの暑さでしばらく海に浸かったりしていたのを覚えている。

広島市へ縁故疎開して一年、十歳だった私は、家族とは別れて寂しかったが、邸宅ともいえる大きな家に住み、大伯父、大伯母あるいは母親の親戚の人たちに囲まれ、東京よりも食

糧事情の良いここで過ごしたいままでは、ある意味で楽しい日々だった。だが、今日の出来事ですっかり変わってしまった。そのとき、朝から数時間もいたそこで、こんなことを考え、ぼう然としていたのだろうか。

夕方になり火事はようやく下火になってきた。大伯父と大伯母はどうしただろう。お腹が空くし、このまま海岸にいても何もない、しつかりしなきゃと思い、千田町の方へ戻ることにした。途中、半壊または全壊状態の家々が続く。ある半壊の家で誰も居ないのを幸い、戸棚の中にあつて埃とガラスの破片が被っているカレーライスを見つけ、埃とガラスを手で除けて、つまみ食いした。

南大橋は今度は崩れそうな橋を渡るのを避け、川を渡った。あたり一帯はところどころに火がくすぶっているだけで、焼け野原になっている。やはり、焼けてしまったのか。だが橋のそばの空き地に来ると、千田町の人々の炊き出しの場所になっていた。今朝、生き残った人達がやっているのだろう。その中で一丁目と表示された場所をさがし、そこに割り込んでようやくおにぎりにありついてほっとした。知らない人たちだったが、親切な家族がいて、その夜は急造の掘っ建て小屋に泊めてくれた。そのとき、親切な人たちの好意にすがり、とりあえず大人に頼って生きるしかない、子供心に考えていたと思う。

こうして八月六日の長い一日が終ったのである。

翌八月七日、掘っ立て小屋で朝を迎えた私は起き出してすべてが変わってしまった辺りの様相をぼんやり眺めていた。まもなく従兄弟が私を捜しにきてくれた。住んでいた家に行くと案の定あらかた焼けつくし、くすぶっている。一年間とはいえ住み慣れた家が無残な姿になっていたが昨日からの大きな出来事の連続で感傷が湧かない。マンホールに貯蔵してあった大事なものも焼けてしまった。日赤病院の陰で猛火に耐えて無事だった大伯父と大伯母はとりあえず共同防空壕で寝起きすることになった。

「達生を草津へ連れてって」大伯母は従兄弟にそう言って頼んだ。広島市郊外の草津町に遠い親戚が住んでいる。私が住むところを大伯母は心配してくれたのだ。草津町へ行く途中、電車通りは電線がぶら下がり危険だったので川沿いの道を歩いた。川沿いには川に向かって死体があるいは筵を掛けられて累々と横たえられている。一様に黒焦げになっていて歯だけが真っ白だったのを憶えている。

草津町では毎日のように近所の家で葬式が行われていた。市内に通勤、通学していた人たちがそのとき遭遇したのだ。終戦を迎えた私は従兄弟に連れられて空襲の心配がなくなった広島市内に伯母を見舞いに行った。途中、街は焼けつくし、

ところどころ鉄骨の建物が残っているだけだ。市内電車に乗るとつり革が下がっている横棒にハエがびっしり止まっている。

家屋疎開の現場で熱線を浴び全身に大火傷を負った伯母は国民学校の階段の踊り場に寝かされていた。火傷のあとにハエがたかり蛆がわいている。蛆を箸でつまみ、ハエを追うが、追っても追っても飛んでくる。

伯母は「うちはあんたの身代わりになってあげたんよ」と言った。私はそれに返すことがなかった。伯母が私に策を取りに家に行くよう命じ、家に帰り軒下で涼んでいたそのとき、原爆が落ち、幸い建物の陰で助かったのだ。可愛がってくれた伯母のそのひとはその後何年間も私の脳裏を離れなかった。母親を失った従兄弟にも申し訳ない気がした。伯母は十月に亡くなった。

十月に父親が迎えに来て親兄弟が住む逗子へ来た。戦争の間、海軍軍人だった父、海軍兵学校に入校していた兄、広島へ疎開していた私、横須賀で空襲を凌いだ母、姉、弟、離れ離れの六人が久しぶりにそろい、お互いの無事を喜び合った。



## つばきの会の歩み

〔昭和63年〕(88)

- 10月16日 県原爆被災者の会の幹部役員並びに来賓各位のご臨席の下、逗子会館に於て逗子市被爆者の会（略称つばきの会）結成。
- 11月1日 市内被爆者を対象にアンケート調査実施。
- 12月6日 逗子市長宛被爆者援護措置に関する要望書を提出。
- 12月18日 国会への被爆者援護法制定請願に参加。

〔平成元年〕(89)

- 2月1日 逗子市長と懇談、被爆者援護措置について改めて要望。
- 3月2日 被団協中央行動、国会請願に参加。
- 3月7日 逗子市議会議長及び民生経済委員長を訪問、被爆者援護措置に関し改めて陳情。
- 4月16日 小坪公民館にて第一回つばきの会総会を開催  
(県被災者の会、井上事務局長出席)
- 4月29日 県原爆被災者の会総会に参加。
- 5月20日 原水爆禁止平和行進に参加。
- 6月1日 逗子市長に面会、被爆者援護措置に関し重ねて要

望。

- 9月24日 第23回県原爆犠牲者慰霊祭参列
- 10月6日 被爆者援護措置に関する陳情が逗子市議会を通過。
- 11月28日 葉山病院にて被爆者集団健康診断を実施。

〔平成2年〕(90)

- 2月1日 逗子市長と面談、被爆者援護措置と県「原爆火の塔」建立助成について要請。(県被災者の会、土田会長出席)
- 4月9日 県原爆慰霊碑(大船観音内)清掃実施。
- 4月20日 「私の証言」(被爆体験記)原稿募集。
- 5月20日 沼間公民館にて第2回つばきの会総会を開催。
- 5月22日 葉山病院にて被爆者集団健康診断を実施。
- 6月20日 逗子市(福祉部)より初めて補助金交付。平成2年度事業補助、10万8千円。
- 7月14日 横浜文化体育館にて平和フェスティバル開催。
- 7月29日 朗読劇「きのこ雲」に出演。
- 7月29日 第24回神奈川県原爆犠牲者慰霊祭及び「原爆の火の塔」除幕採火式典に参加。
- 8月6日 被爆45年原爆犠牲者慰霊祭・平和祈念式典(広島)に2名参加。
- 9月30日 「非核・平和、被爆証言と映画のつどい」を逗子社会教育会館にて開催。(県被災者の会、土田会

長講演)

10月23～25日 被爆45周年被爆者援護法制定国会請願に参加。

〔平成3年〕(91)

2月10日 湾岸戦争反対横須賀集会に参加。

2月12日 被爆者援護法制定国会請願に参加。

4月28日 県原爆被災者の会総会に参加。

5月26日 第3回つばきの会総会を沼間公民館にて開催。

7月1日 逗子市長と面談、被爆者援護措置―見舞金について重ねて要望。

7月25日 県原爆慰霊碑(大船観音内)清掃実施。

8月9日 第46回県原爆犠牲者慰霊平和祈念式典(長崎)に

2名参加。

8月11日 「くるな核空母インディペンデンス」集会に参加。

8月13日 逗子市社会福祉協議会事務局長に面会、被爆者援護につき協力要請。

9月10日 インディペンデンス入港反対座り込みに参加。

9月12日 逗子市(市民健康課)より平成3年度事業補助金5万4千円交付。

9月12日 逗子市議会(議長)に被爆者援護措置―見舞金に  
関し要望書提出。

9月29日 第25回県原爆犠牲者慰霊祭参列。

10月13日 「被爆証言と原爆映画のつどい」開催。逗子市役

所会議室。(林京子氏ら証言)

12月3日 逗子市財政課に平成4年度補助金交付要望書提出。

〔その他〕

●毎月第3日曜日 「つばきのつどい」(役員・会員参加自由)

沼間公民館にて午後2時より開催。

●県被災者の会、運営会議。原則として毎月1回出席。

●「つばきのたより」(機関誌) 通算8回発行。

〔平成4年〕(92)

1月6日 ブッシュ米大統領の原爆投下正当化発言の抗議行

動及びアピール署名活動に参加。

4月15日 逗子市社会福祉協議会に補助金交付要望書提出、

一万円決定。

6月2日 市財政課に補助金要望書提出、69万4千円決定。

7月19日 「原爆の話」と映画「予言」の集い。逗子市役所にて、  
立教大学教授服部学先生。

10月14日 横浜・中野しおり様(84歳)より募金2万円を頂く。

10月31日 つばきの会の「広島・長崎からの証言」(英文)出版。

11月5～7日 第6回国際非核自治体会議横浜にて開催。

(前記英文証言集贈呈、配布)

〔平成5年〕(93)

1月4日 沢市長に見舞金一人五千円補助要望申入れ。

2月7日 核戦争防止神奈川県医師の会非核平和の集いに参加。

3月12日 三浦国際シンポジウム。被爆者による「きのこ雲」朗読。

5月23日 第5回つばきの会総会開催、沼開公民館にて。

平成5年度事業補助金69万4千円（被爆証言集発行15万円含む）。

5月26日 松谷英子さん長崎原爆裁判。地裁にて全面勝訴。国は福岡高裁に控訴。

6月7日 国会解散で被爆者援護法廃案。

7月24日 被爆証言と映画の集い、図書館ホールにて。

「医師と原爆」さがみ生協長谷川倫雄先生。被爆証言、井上典民氏。記録映画「もしこの地球を愛するなら」「核戦争後の地球」上映。

7月 「広島・長崎からの証言」（和文）出版。

9月10日 核兵器廃絶、平和都市宣言とこれを具体化する条例を求める陳情を市議会に提出。

平成6年3月3日了承。

10月3日 横浜清水ヶ丘高校にて被爆証言、祐野事務局長。

〔平成6年〕(94)

1月4日 事業補助、条例制定。市長に要望。

平成6年度事業補助金59万円決定。

5月22日 第6回つばきの会総会、図書館分館。

祐野新会長選出。（田栗前会長、県被災者の副会長へ。）

8月28日 映画「月光の夏」と元特攻隊員信太正道氏のお話。

好評につき3回上映、入場者718名（図書館ホール）。

9月16日 被爆50周年事業の陳情行動。神奈川県議会へ。

11月8～10日 被団協中央大行動に参加。

厚生省、自民党、社会党前に座り込み、請願署名一、〇〇〇万人突破。

12月9日 被爆者援護法衆院本会議で可決成立、被爆者の各種手当の受給促進について調査（H6・3・31現在

在逗子市41名55%、神奈川県344名56%）

〔平成7年〕(95)

1月20日 鎌倉わかみやにて神奈川県原爆被災者の会新年会

（逗子、葉山支部担当）

4月19日 故衣川舜子さん葬儀、法勝寺にて。

5月1日 平井市長に被爆者への支援を要請、平成7年度事業補助金60万円決定。

8月27日 被爆50年、平和である事を願って、被爆証言と映画のつどい。被爆証言、土田康さん。映画「戦争、

こどもたちの遺言」上映（図書館ホール）。

〔平成8年〕（96）

事業補助金54万円決定。

6月29日 核兵器廃絶署名活動、横浜伊勢佐木町。

8月21～23日 返子市、市内在住中学2年生20名をピース

メッセンジャーとして広島に派遣（第1回）。

伊崎副会長同行。

9月14日 平和である事を願って被爆証言と映画の集い。

被爆証言、平井千三氏、武田恵美子さん。

映画「マヤの一生」上映。共催コープかながわ返

子葉山委員会（以下コープという）（図書館ホール）。

〔平成9年〕（97）

事業補助金47万円決定。

5月25日 第9回つばきの会総会、図書館分館。

8月3日 「原爆投下は誰の責任か」植田敦名城大学教授、

信太正道氏。朗読劇「きのこ雲」。

9月13日 平和である事を願って、子供たちの幸せのために。

映画「夏少女」朗読劇「きのこ雲」上演（図書館

ホール）。

8月20～22日 ピースメッセンジャー長崎派遣（第2回）、

伊崎副会長同行。長崎市より「長崎の鐘（アンジェ

ラスの鐘）」のレプリカを返子市とつばきの会に  
それぞれ寄贈される。

〔平成10年〕（98）

事業補助金、42万3千円。（以後変更の通知ある

まで毎年同額）

5月26日 第10回つばきの会総会、図書館分館。

6月12日 医療生協返子診療所開設祝賀会。

6月19日 年金者組合主催、横浜にて朗読劇「きのこ雲」に

参加。

7月10日 池子小学校にて親子映画会共催。

8月6日 原水爆禁止世界大会広島に宮川・小田さん参加。

8月19～21日 ピースメッセンジャー広島派遣（第3回）、

堤副会長同行。

9月19日 「原爆と人間展」展示。朗読劇「きのこ雲」上演。

映画「ヒロシマと云う名の少年」上映、共催コー

プ（図書館ホール）。

10月24日 国連デー、核兵器廃絶署名行動、京急横須賀中央

駅前にて。

11月16～20日 市民ホールにて、原爆と人開展。聖マリア小

学校感想文展示。

〔平成11年〕（99）

4月16日 長島新市長と面談、つばきの会の要望申入れ。

8月21-22日 「原爆と人間展」コープかながわ桜山店にて。  
ビデオ『ヒロシマ母たちの祈り』上映。

9月18～20日 ピースメッセンジャー長崎派遣（第4回）、  
堤副会長同行。

10月24日 医療講演会、『介護保険と長寿について』逗子診  
療所吉田医師。

11月15～19日 市民ホールにて「原爆と人間展」開催。

#### 〔平成12年〕（00）

被爆55年記念事業に2万5千円、市より県被災者  
の会へ補助。

2月17日 コープケーション湘南、藤沢市民会館にて朗読劇  
「きのこ雲」に出演。

5月27日 第12回つばきの会総会、図書館分館。  
沖縄サミット開催につき、各国代表宛核兵器廃絶  
を訴える手紙と英文証言集を送る。

6月29日～7月3日 被爆55年記念、横浜そごう前広場にて  
「原爆と人間展」開催。（県被災者の会）

7月18日 長崎松谷原爆症認定訴訟、最高裁で全面勝訴（12  
年経過）。

8月20日 平和講演会『原爆投下で戦争が終ったのではない』  
植田敦名城大学教授。「原爆と人間展」(図書館ホー

ル)。

8月23～25日 ピースメッセンジャー広島派遣（第5回）、  
祐野会長同行。

8月24日 「母と子の原爆展」コープかながわ桜山店にてビ  
デオ上映。戦時中の食べ物、パネル展示。コープ  
と共催。

9月11～14日 「原爆と人間展」「忘れられないあの日」詞画  
展。市民ホール。

10月1日 県被災者の会、「忘れられないあの日」詞画集発刊。  
市内各小中学校、友好団体等に贈呈。

#### 〔平成13年〕（01）

1月23日 神奈川県原爆被災者の会結成35周年記念祝賀会  
（横浜東急ホテル）に参加。

5月26日 第13回つばきの会総会、図書館分館。

7月14日 第14回親子映画会共催、「原爆と人間展」パネル  
展示。

8月22～24日 ピースメッセンジャー長崎派遣（第6回）、  
祐野会長同行。渕中学校と交流、被爆樟の木（二  
世）を寄贈される。

9月10～14日 「原爆と人間展」「忘れられないあの日」詞画  
展、市民ホール。

10月14日 前記長崎市渕中学校より寄贈の被爆樟の木を長島

市長出席の下、市民運動公園に植樹。

〔平成14年〕(02)

3月2日 沼間小学校5年生113名に被爆証言と「忘れられな

いあの日」ビデオ放映。

5月31日 第14回つばきの会総会、高齢者センター。

7月6日 池子小学校体育館にて第15回親子映画会共催。

「原爆と人間展」パネル展示。

8月18日 「忘れられないあの日」ビデオ放映と被爆証言。

図書館講座室にて。くらし、平和、民主主義を守る  
逗葉懇談会を後援。

8月21～23日 ピースメッセンジャー広島派遣(第7回)、

織町中学校と交流、堤副会長同行。

9月9～13日 「原爆と人間展」市民ホール。

〔平成15年〕(03)

2月10日 沼間小学校5、6年生に被爆証言。

5月29日 第15回つばきの会総会、高齢者センター。

7月5日 第16回親子映画会「ヨッチャンのビー玉」、被爆

証言、池子小学校体育館。

8月20～22日 逗子市ピースメッセンジャー長崎派遣(第

8回)、堤副会長同行。

9月16～19日 「原爆と人間展」市民ホール。

被爆証言 10月16日 逗子小学校6年生。

10月31日 逗子中学校2年生。

11月12日 逗子中学校道徳教育発表大会。

〔平成16年〕(04)

被爆証言 1月14日 久木小学校6年生。

2月20日 聖マリア小学校6年生。

5月9日 逗子アリーナ(市制50周年記念事業、

同時に逗子市非核平和都市宣言を  
表)

5月29日 第16回つばきの会総会、高齢者センター。

7月3日 第17回親子映画会(もも子かえるの歌がきこえる

よ)池子小学校体育館。

8月18～20日 ピースメッセンジャー広島派遣(第9回)、

祐野会長同行。

9月13～17日 原爆と人間展、市役所市民ホール。

被爆証言 10月26日 久木小学校6年生。

10月27日 逗子小学校6年生。

12月21日 池子小学校4年生。

〔平成17年〕(05)

5月27日 第17回つばきの会総会、高齢者センター。

7月9日 第18回親子映画会(エッチャンのせんそう)池子

小学校体育館。

8月9日 被爆60年原爆犠牲者慰霊平和祈念式典（長崎市平和公園） 祐野会長参列。

8月17日～19日 ピースメッセンジャー長崎派遣（第10回）、伊崎副会長同行。

9月12日～19日 原爆と人間展、新築、新装の逗子市文化プラザギャラリー。（秦野支部共催）

9月18日 被爆60年平和のつどい、文化プラザホール。  
日色ともえ他出演。

被爆証言 10月26日 逗子小学校6年生。  
11月28日 小坪小学校4年生。

〔平成18年〕（'06）

1月22日 神奈川県原爆被災者の会結成40周年記念集会（横浜エクセルホテル東急）に参加。

被爆証言 1月27日 沼間小学校6年生。  
2月7日 久木小学校6年生。

5月30日 第18回つばきの会総会、高齢者センター。  
7月1日 第19回親子映画会（アニメ映画ハードル）、被爆証言、池子小学校体育館。

8月16～18日 ピースメッセンジャー広島派遣（第11回）。

伊崎副会長同行。  
9月11日～18日 原爆と人間展、文化プラザギャラリー。

〔平成19年〕（'07）

1月23日 ホテル好養（鎌倉市大船）にて神奈川県原爆被災者の会新年会（担当、逗子、葉山支部）。

1月27日 祐野孝文会長逝去（伊崎副会長、会長代行に）。  
被爆証言 1月25日 久木小学校6年生。

2月23日 東京、学習院女子中等科2年生。  
6月7日 第19回つばきの会総会、伊崎会長選出（みなも）。

被爆証言 7月8日 逗子市広報課（広報ずし8月15日号に掲載）。

8月6日 湘南ビーチFM（葉山）。  
8月18日 親子映画会（アンジェラスの鐘）文化プラザホール。

8月22～24日 ピースメッセンジャー長崎派遣（第12回）、逗子平井市長同行。堤副会長同行。

9月12～17日 原爆と人間展、文化プラザギャラリー。  
被爆証言 10月22日、11月9日 逗子中学校2年生。

〔平成20年〕（'08）

被爆証言 1月30日 沼間小学校6年生。  
2月12日 久木小学校6年生。

2月24日 逗子小学校6年生。  
5月26日 第20回つばきの会総会（みなも）。

8月1日 親子映画会（クロがいた夏）文化プラザホール。  
8月20～25日 ピースメッセンジャー広島派遣（第13回）、

堤副会長同行。

8月22～25日 原爆と人間展（横浜そごう前）当番参加。

9月10～15日 原爆と人間展、文化プラザギャラリー。

被爆証言 7月20日 朝日新聞長崎総局記者（鎌倉）。

9月4日 湘南ビーチFM（葉山）。

9月22日 逗子小学校6年生。

10月29日 NHK長崎放送局（県被災者の会事務

所）。

11月21日 民医連勉強会（横浜市金沢区）。

### 〔平成21年〕（09）

被爆証言 2月17日 久木小学校6年生。

2月23日 沼間小学校6年生。

5月18日 第21回つばきの会総会（みなも）。

神奈川県原爆症認定訴訟傍聴、於横浜地方裁判所。

第1回（平成16年12月13日）から結審の第23回（平成21年

6月15日）まで毎回必ず何人か参加、傍聴。判決は本年11

月30日の予定。

7月11日 親子映画会（ぞう列車がやってきた）文化プラザ

ホール。

被爆証言 8月13日 ピースメッセセンジャー事前学習会。

8月19～21日 ピースメッセセンジャー長崎派遣（第14回）伊

崎会長同行。

被爆証言 8月31日 被爆証言と「原爆と人間展」紹介、湘

南ビーチFM。

9月2～7日 第12回「原爆と人間展」開催、文化プラザギャ

ラリー。

11月30日 神奈川県原爆症認定訴訟判決。

### 〔平成22年〕（10）

被爆証言 2月9日 沼間小学校6年生。

5月11日 第22回つばきの会総会（みなも）。

被爆証言 8月12日 ピースメッセセンジャー事前学習会。

8月21日 親子映画会（Piとべないホテル）文化プラザホー

ル。

8月18～20日 ピースメッセセンジャー広島派遣（第15回）

伊崎会長同行。

被爆証言 9月9日 被爆証言と「原爆と人間展」紹介、湘

南ビーチFM。

9月8～13日 第13回「原爆と人間展」文化プラザギャラリー。

被爆証言 9月11日 「被爆者の声を聴く会」交流センター

2階。

### 〔平成23年〕（11）

被爆証言 1月31日 逗子小学校6年生。

2月8日 沼間小学校6年生。

5月28日 第23回つばきの会総会（みなも）。

被爆証言 8月11日 ピースメッセンジャー事前学習会。

8月17～19日 ピースメッセンジャー長崎派遣（第16回）

堤副会長同行。

8月25～27日 第1回ずし平和デー（文化プラザホール・ギャ

ラリー）協賛。

8月26日 親子映画会（ガラスのうさぎ）文化プラザホール。

9月14～19日 第14回「原爆と人間展」文化プラザギャラリー。

〔平成24年〕（12）

被爆証言 1月18日 沼間小学校6年生。

2月16日 久木小学校6年生。

2月28日 逗子小学校6年生。

5月24日 第24回つばきの会総会（みなも）。

堤会長・上田副会長選出。

8月 広報「ずし」8月平和特集号に「つばきの会」ほか

か平和活動を紹介。

被爆証言 8月14日 ピースメッセンジャー事前学習会。

8月22～24日 ピースメッセンジャー広島派遣（第17回）

上田副会長同行。

8月24～26日 第2回ずし平和デー（文化プラザホール・ギャ

ラリー）協賛。

8月25日 親子映画会（河童のフウと夏休み）文化プラザホー

ル。

被爆証言 9月3日 被爆証言と「原爆と人間展」紹介、湘

南ビーチFM。

9月5～10日 第15回「原爆と人間展」文化プラザギャラリー。

〔平成25年〕（13）

被爆証言 1月20日 沼間小学校6年生。

2月7日 久木小学校6年生。

5月19日 第25回つばきの会総会（みなも）。

被爆証言 8月6日 ピースメッセンジャー事前学習会。

8月19～21日 ピースメッセンジャー長崎派遣（第18回）

上田副会長同行。

8月23～26日 県「原爆と人間展」（横浜そごう前広場）。

8月23～26日 第3回ずし平和デー（文化プラザホール・ギャ

ラリー）協賛。

8月26日 親子映画会（つるにのつて〜とも子の冒険・SO

Sこちら地球）文化プラザホール。

被爆証言 9月3日 被爆証言と「原爆と人間展」紹介、湘

南ビーチFM。

9月4～9日 第15回「原爆と人間展」文化プラザギャラ

リー。

被爆証言 12月17日 沼間小学校6年生。

〔平成26年〕(14)

被爆証言 2月6日 久木小学校6年生。

5月25日 第26回つばきの会総会(みなも)。

6月8日 堤達生会長逝去(上田副会長、会長代行)。

6月22日 臨時総会、上田会長・上野副会長選出(市民交流センター)。

7月18日 県庁「原爆と人間展」当番参加。

8月 広報「ずし」逗子市非核平和都市宣言10周年特集に「つばきの会」のメッセージと活動紹介。

被爆証言 8月7日 ピースメッセンジャー事前学習会。

8月17～19日 ピースメッセンジャー広島派遣(第19回) 上田会長同行。

8月21～23日 第4回ずし平和デー(文化プラザホール・ギャラリー)協賛。

8月21日 親子映画会(対馬丸)文化プラザホール。

8月22日 「原爆と人間展」(パネル展)文化プラザホワイエ。

8月23日 ピースメッセンジャー報告・平和都市宣言10周年 「被爆アオギリ2世」の記念植樹(文化プラザ)。

8月22～25日 県「原爆と人間展」(横浜そごう前)参加。  
被爆証言 12月4日 沼間小学校6年生。

〔平成27年〕(15)

被爆証言 2月3日 久木小学校6年生。

平和行進に毎年参加

核兵器廃絶と世界平和を願って毎年行われる平和行進には、つばきの会も参加しています。平和行進は五月初め、東京夢の島を出発、東海道、山陽道の各県を経て広島に向います(八月初旬到着)。行進団は途中の5月中旬、葉山から逗子・鎌倉を経て大船観音寺の原爆犠牲者慰霊碑に参拝し、被爆者の会と交流集会を行っています。

ヒバクシャ国際署名の取り組み

ヒロシマ・ナガサキの被爆者が訴える核兵器廃絶国際署名を成功させようと立ち上がる。

キックオフ集会(2016年9月)に20団体が参加「ヒバクシャ国際署名」が始まりました。

神奈川県内は、各団体が『なぜ取り組むのか!』学習会・駅前など街頭署名活動・講演会や交流の集い・神奈川県被災者の会は、各支部が会員に向けて署名活動・生協連推進委員会は署名の取まとめ・県内市町村議員・宗教関係・神奈川県原水協関係の取りまとめ・国内外から署名数はヒバクシャ国際署名(2020年9月)1261万筆以上になった。

国連で(2017年)「核兵器禁止条約」が採択された。

※123か国が賛成した。(核保有国と被爆国日本は不参加) 国と地域の50ヶ国以上の批准国で「核兵器禁止条約」発効する。(2021年1月22日)

※2022年2月22日現在、署名した国は86か国★批准国54か国。

私達は日本政府に「核兵器禁止条約」の署名と批准を求める。戦争による核攻撃を受けた唯一の国である日本政府は、核兵器の禁止から廃絶へ今こそ先頭に立って世界をリードする時です。

● つばきの会役員(平成十四年度)

会長 祐野孝文  
 副会長 伊崎善明  
 〃 堤達生  
 会計 山田和子  
 〃 宮川千恵子  
 会計監査 近藤敏子  
 委員 尾山隆造  
 〃 宅島ミヨ  
 〃 千種文子  
 〃 菊池スミ  
 顧問 田栗末太

● つばきの会役員(平成二十五年年度)

顧問 田栗末太  
 顧問 伊崎善明  
 会長 堤達生  
 副会長 上田芳雄  
 委員(会計) 宮川惇价  
 〃(会計) 宮川千恵子  
 〃 宅島ミヨ  
 会計監査 上野靖子

● つばきの会役員(平成二十六年年度)

顧問 田栗末太  
 会長 上田芳雄  
 副会長 上野靖子  
 会計 宮川千恵子  
 会計監査 宮川惇价  
 委員 伊崎善明  
 〃 上田美代子  
 顧問 同  
 顧問 田栗末太  
 会長 上田芳雄  
 副会長 藤原功紹

● つばきの会役員(令和三年年度)

顧問 田栗末太  
 会長 上田芳雄  
 副会長 藤原功紹

会計 宮川千恵子

会計監査 宮川惇价

委員 井上典民

〃 上野靖子

〃 米倉久子

● 逗子市の被爆者数 十七人(令和四年三月末)

● 神奈川県内の被爆者数 三、三三八人( )

● 全国の被爆者数 一二七、七五五人( )

● 逗子市の木 椿(つばき)(つばきの会の由来)

● 逗子市の花 杜鵑草(ほととぎす)

被爆証言集

一九九二年(平成四年)三月初版  
 二〇〇二年(平成十四年)十月増補改訂  
 二〇〇九年(平成二十一年)六月第三版  
 二〇一三年(平成二十五年)八月第四版  
 二〇一五年(平成二十七年)三月第四版改訂  
 二〇二二年(令和四年)三月第四版一部改訂  
 発行 神奈川県逗子市被爆者の会(つばきの会)  
 〒249-0007 逗子市新宿一―六―四三―二〇七  
 印刷 (有)大久保印刷 上田芳雄方  
 電話 〇四六(八七二)三六八六

